

第10回横浜市都市美対策審議会政策検討部会

次 第

日 時 : 平成 26 年 12 月 4 日(木)
午前 10 時 00 分から 12 時 00 分まで

会 場 : 横浜市開港記念会館7号室

【次 第】

1 開 会

2 部会委員紹介

3 部会長挨拶

4 議 事

(1) 今後の都市デザイン行政について
ア (仮称)横浜都市デザインビジョンについて(審議)

(2) その他

5 閉 会

資 料

資料1:(仮称)横浜都市デザインビジョンについて

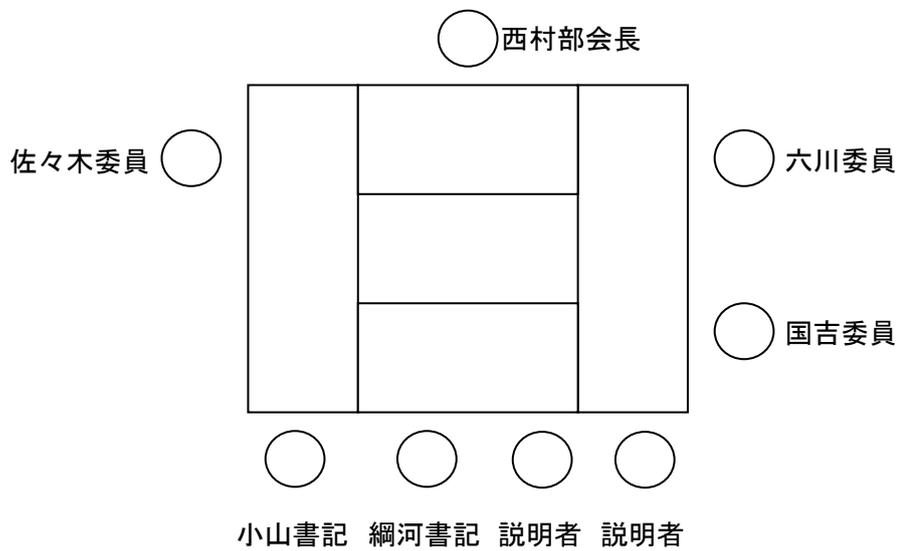
資料2:第9回横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録

【第10回横浜市都市美対策審議会政策検討部会 座席表】

日時 : 平成26年12月4日(木) 10:00~12:00

会場 : 横浜市開港記念会館 7号室

速記録



記者席

事務局・関係者

傍聴者(5人)

➡
(出入口)

受付

第10回横浜市都市美対策審議会政策検討部会 委員名簿

開催日時 : 平成26年12月4日(木) 10:00~12:00

		氏名(敬称略)	現職等
1	部会長	西村 幸夫	東京大学先端科学技術研究センター所長 (都市デザイン)
2	委員	佐々木 葉	早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授 (景観)
3	"	中津 秀之	関東学院大学建築・環境学部建築・環境学科准教授 (ランドスケープ)
4	"	六川 勝仁	市民委員
5	"	国吉 直行	横浜市立大学特別契約教授 (都市デザイン)

6	書記	小山 孝篤	横浜市都市整備局企画部長
7	"	綱河 功	横浜市都市整備局企画部都市デザイン室長

(仮称) 横浜都市デザインビジョンについて

資料 1-1 (仮称) 横浜都市デザインビジョン (案)

資料 1-2 (仮称) 横浜都市デザインビジョン (案) 概要版 (市民意見募集資料)

URBAN

DESIGN

VISION

YOKOHAMA

横浜都市デザインビジョン

これからの横浜をデザインするための羅針盤

横浜都市デザインビジョンは、都市デザインを産学官民など様々な立場の方々がより主体的に取り組むために、理念や価値観を共有することを目的に作成しました

横浜都市デザインビジョン

—これからの横浜をデザインするための羅針盤—

2015年〇月

横浜市

「魅力と個性のある人間的な都市」の実現を目指して

横浜は、これまで「魅力と個性のある人間的な都市」という理念の実現を目指して、半世紀近く前から都市デザインに取り組んできました。都市を様々な面から総合的に捉えて風景と価値をつくる。その取組は、地域によるシンボルツリーの保全から歴史を活かしたまちづくり、ベイブリッジや赤レンガ倉庫などの整備によるスカイラインや景観の形成まで、**成果として今の横浜に固有の風景を生み、価値を与え、多くの人を惹きつけています。**

しかし**社会と時代は刻々と変化していきます**。特に昨今、横浜のみならず、日本さらには世界全体が大きく変化し、様々な場面でこれまでのやり方や考え方だけでは通用しないことが増えていくと多くの人を感じているのではないのでしょうか。社会としても成熟した中、**都市が抱える問題・課題、必要とされることは、複雑かつ多様化**しています。都市全域に関わるものから小さなエリア固有のものまで、**対象範囲の規模も均一ではありません**。さらには、分野や世代、立場ごとにも分かれ、及ぶ領域は多岐に渡ります。そしてそれらの多くは一朝一夕に解決されるものではなく、**長い時間を要するものばかりです**。そんな時代においてもしっかりと理念の実現に向かって歩めるよう、横浜都市デザインとその活動の考え方やあり方も変化する必要があります。

それぞれが都市横浜の未来の「風景」を思い描き、日々その実現に向けて主体的に取り組んでいる。そんな状況にすることを「都市デザイン活動の日常化」と呼び、本ビジョンとともに目指します。

これまで行政や専門家が先導的に行う印象が強かった**都市デザイン活動**（＝都市デザインに取り組むこと）を、複雑かつ多様な都市の問題・課題・ニーズに対して最適な成果を生むために、今後はより**横浜市全域に広げ、積極的かつ持続的に行われるものにしていきます**。

「都市デザイン活動の日常化」とは、日々の企業活動の中で取り組まれる状況（**産業化**）、日々の生活習慣の一部となる状況（**習慣化**）、さらには、そうした活動自体が価値をもち継承されていく状況（**文化への昇華**）などをつくることであり、簡単な挑戦ではありません。しかし、長く都市デザインに取り組んできた**横浜だからこそ取り組めること**であり、達成した先には、**今よりさらに固有の風景と価値をもち、人をますます惹きつける都市横浜となるはず**です。

本ビジョンは、そんな壮大な挑戦に向けて取り組む**すべての人と共有するいわば羅針盤**なのです。

目次

序章 本ビジョンをお読みいただく前に

- 0-1. 横浜都市デザインの理念 . . . 08
- 0-2. 横浜都市デザインの4W1H . . . 10
- 0-3. 本ビジョンの流れと構成 . . . 12

第1章 都市への着眼点

- 1-1. 着眼点をもつ意味・意義 . . . 16
- 1-2. 着眼点をもつことで広がる可能性 . . . 18

第2章 共有する価値観

- 2-1. 価値観を共有する意味・意義 . . . 22
- 2-2. 都市横浜にとっての価値観 . . . 22
- 2-3. 5つの価値と背景 . . . 24

第3章 取り組み方

- 3-1. 取り組み方の意味・意義 . . . 28
- 3-2. 都市デザイン行政としての姿勢 . . . 30
- 3-3. 都市デザイン行政としての視点 . . . 32
- 3-4. 都市デザイン行政としての行動 . . . 34

別章 都市横浜の風景スケッチブック

- 一風景スケッチブックの意味・意義 . . . 42
- 一風景スケッチ 00~07 . . . 44

- 付録 横浜都市デザインをもっと知る . . . 62

一序章一

本ビジョンをお読みいただく前に

序章 本ビジョンをお読みいただく前に

0-1 横浜都市デザインの理念

横浜都市デザインは、「魅力と個性のある人間的な都市」の実現に向け、都市を様々な面から総合的に捉え、固有の風景と価値をつくることです

高度経済成長期の頃から横浜で都市デザインへの取組が始められて以来、「魅力と個性のある人間的な都市」の実現がその理念として掲げられ、成果として固有の風景と価値を生んできました。

「魅力と個性のある人間的な都市」とはどのような都市か。

その解釈は時代や社会に応じて変化しますが、一方で言葉そのものは変わることのない普遍性と柔軟性をもった理念です。そして、時代や社会に応じて、魅力とは何か、個性とは何か、人間的とは何かを考えることの重要性も伝えている言葉です。

今回本ビジョンを策定するにあたり、「魅力と個性のある人間的な都市」を以下のように解釈します

魅力のある	=	暮らしたい、活動したい、また訪れたいという思いを人から引き出す力がある
個性のある	=	他の都市との違いがあり、ここにしかない固有の特性がある
人間的な	=	都市基盤の安全性や機能性などが、人の生活や活動のためにある

複雑かつ多様な問題・課題・ニーズへの対応が求められるこれからの時代において、上記のような条件がそろった都市となるためには、横浜市全域で、様々な人が主体的に取り組む状況をつくる「都市デザイン活動の日常化」が必要です。

序章

横浜都市デザインビジョン

序章 本ビジョンをお読みいただく前に

0-2 横浜都市デザインの4W1H

横浜都市デザインは、横浜のすべてに関わるものです

1. 取り組む主体は都市横浜に関わる全ての人

本ビジョンは横浜市が策定するものですが、横浜都市デザインの主体は都市横浜に関わる全ての人です。公共施設やインフラの整備が主だった時代においては行政や専門家、開発事業者などが中心となることが多かった都市デザインですが、それぞれの地域や分野、立場ごとの課題・問題・ニーズにも取り組むこれからの時代においては、横浜に関わる全ての人がより主体的に取り組む必要があります。

2. 自らの都市は自らでつくる

行政や専門家など特定の人が描く未来像に従って取り組むのではなく、個々が主体性をもって都市に関わり、自らの生活を豊かにすることと結びつけながら、都市横浜の風景を描き、共有し、その実現に向かって取り組むことを、横浜都市デザインは重視します。

3. 横浜都市デザインの「都市」は市全域

通常「都市」は都心部と同義のものとして考えられることが多いように思います。しかし実際は、都心部と郊外部などのエリア同士が相互に補完することなどにより成り立っています。都心部から郊外部まで、臨海部から山林部まで、すべてを「都市横浜」と捉え、都市デザインの対象範囲と考えます。

4. 様々な領域を横断する

都市デザインが建物や街並みの色や形態だけを対象にするものであっては表面的な風景と価値しか生むことができません。鳥瞰的な目線から歩行者の目線、スカイラインから細部のおさまり、長期的な構想から短期的・実験的な事業、横浜市内と市外との関係、都市基盤から社会保障などまで、様々なスケールや分野、段階などの領域を横断的に捉え、中身のある風景と価値を生む必要があります。

5. 都市を長期的に捉える

社会や時代が今からは想像できないような変化をし、新たな課題や問題、ニーズが生まれることが予想されます。その際、都市を長期的に捉えて取り組むことで、今の価値観や時流のみで判断する短期的な見方だけでは得れない持続的で本質的な成果や効果の獲得を目指しています。



序章 都市デザインビジョンをお読みいただく前に

0-3 本ビジョンの流れと構成

本ビジョンでは、それぞれが風景を描き、その実現に向けて取り組むための、羅針盤を提示します。

本ビジョンでは具体的な未来像を提示していません。本ビジョンでは、「都市デザイン活動の日常化」を達成するため、個々が風景を描きその実現に向けて取り組むための指針を提示しています。

●都市を的確に捉えるために、都市への「着眼点」を意識することが重要です

これまでの都市デザインは道路や建物などの「空間」づくりに主眼を置いてきました。しかし時代と社会が大きく変化してきた現在においては、個々の生活から企業活動までを含む「営み」、そして空間を体験して得る感情や生活・活動への意欲などの「感性」への着眼も重要です。この3つを意識することで、都市デザインのアプローチの選択肢が増え、総合的に取り組む土台となります。

・・・第1章

●向かうべき方向性を共有するために、「価値観」を共有することが重要です

課題や問題にぶつかったときに方向性を見失わず、それぞれの都市デザインとその活動がより活発かつ自由なものとなるためにも、各活動の拠り所となる価値観、最低限の約束事として共有する価値観が必要です。本ビジョンでは価値観として5つの価値を提示します。これらは、これまでの都市横浜が培ってきたものであり、今後も都市横浜固有の価値として高めていくものでもあります。

・・・第2章

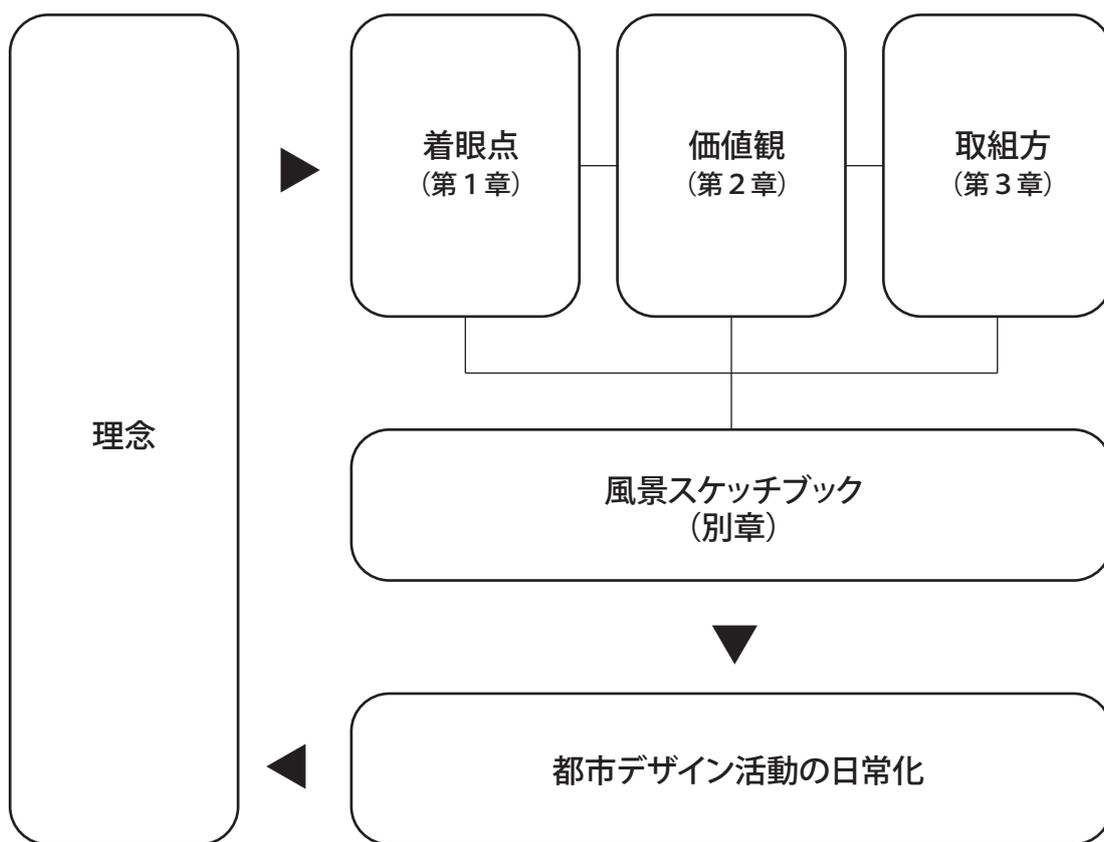
●実現に向けて、それぞれが適切な「取り組み方」を掲げることが重要です

様々な風景が描かれても、それらが実現しなければ意味がありません。描かれた風景の実現のために、関わる人それぞれが適切な取り組み方を掲げ、役割を果たす必要があります。それは、とるべき姿勢、持つべき視点、やるべき行動であり、それらを自らが見出すことが大切です。都市デザイン行政としても、より多くの風景が実現されるための行政自らの姿勢・視点・行動を提示します。

・・・第3章

そして本ビジョンには最後に別章として「風景スケッチブック」をつけています。これは、それぞれが風景を想い、描き始めるためのヒントでもあり、今後様々な人とともに綴っていくものです。そのため、これが完成ではなく、本ビジョン策定後もさらに書き加えられていくことを想定しています。

・・・ 別章



—第1章—
都市への着眼点

第1章 都市への着眼点

1-1 着眼点を持つ意義・意味

都市を捉える着眼点をもつことで、より都市が身近になります

都市は、様々な人が暮らし、訪れ、建物や道路などの都市基盤、海、川、森などの自然環境があり、色々な時間が流れているなど、実に様々な要素で構成されています。そんな都市を正確に定義することは難しいのですが、捉えようとしてみるのが重要です。捉えようとすることで都市をより自らの実感や日々の生活に引き寄せて身近に感じることができます。

本ビジョンでは「空間」「営み」「感性」の3つの着眼点で都市を捉えます。

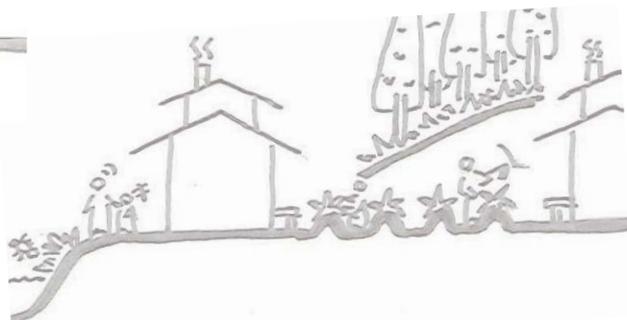
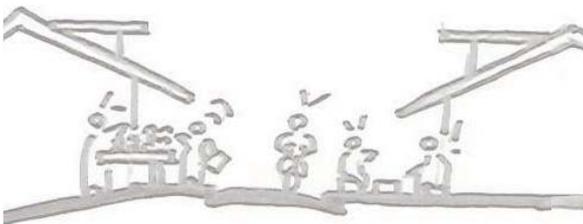
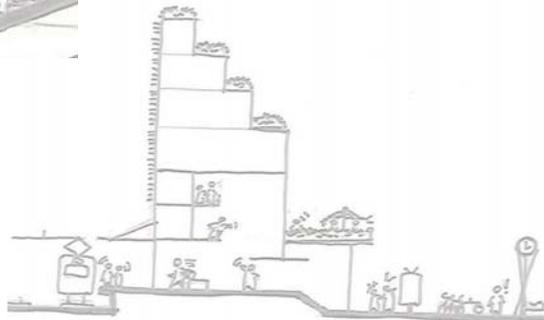
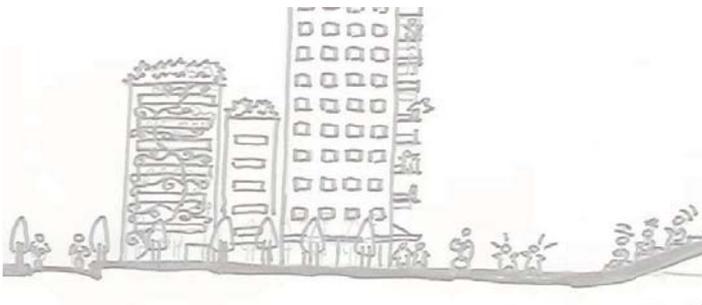
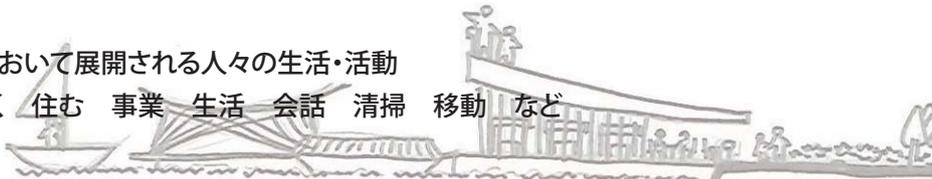
高度経済成長期の頃に始まった横浜都市デザインは、道路や学校、住宅などの都市基盤の整備に対して重点的に関わってきました。しかし、社会が大きく変化してきた現在においては、地形や植生、道路や建物などにより形づくられる「空間」に加え、日々の生活や移動、観光、企業活動などの「営み」も豊かにしていくことが求められています。さらには、より充実した生活や活発な活動を持続させていくためにも、営みに対する動機、驚きや発見、喜びや楽しみなどの「感性」も豊かにしていくことが必要です。

これら都市を捉える3つの着眼点を意識することで、描き目指す風景や取組に総合性が生まれ、都市デザイン活動が産業や文化として定着し、理念の実現に近づくことができると考えます。

【空間】 自然物・人工物などの物的要素により構成される都市基盤や環境
例:建物 街並み 道 街路樹 公園 など

【営み】 空間において展開される人々の生活・活動
例:働く 住む 事業 生活 会話 清掃 移動 など

【感性】 人々が生活・活動を行う際の動機や欲求、およびそれらを通して得られる感情・感覚
例:働きたい 住みたい 訪れたい 楽しい うれしい 心地いい 好き 驚き など



第1章 都市への着眼点

1-2 着眼点を持つことで広がる可能性

都市への着眼点は都市の作用点でもあり、総合的な活動と成果を生む土台にもなります

都市を3つの着眼点から捉えることは、都市デザインに取り組む際に都市のどこに注力するのかという作用点をもつことにもなります。

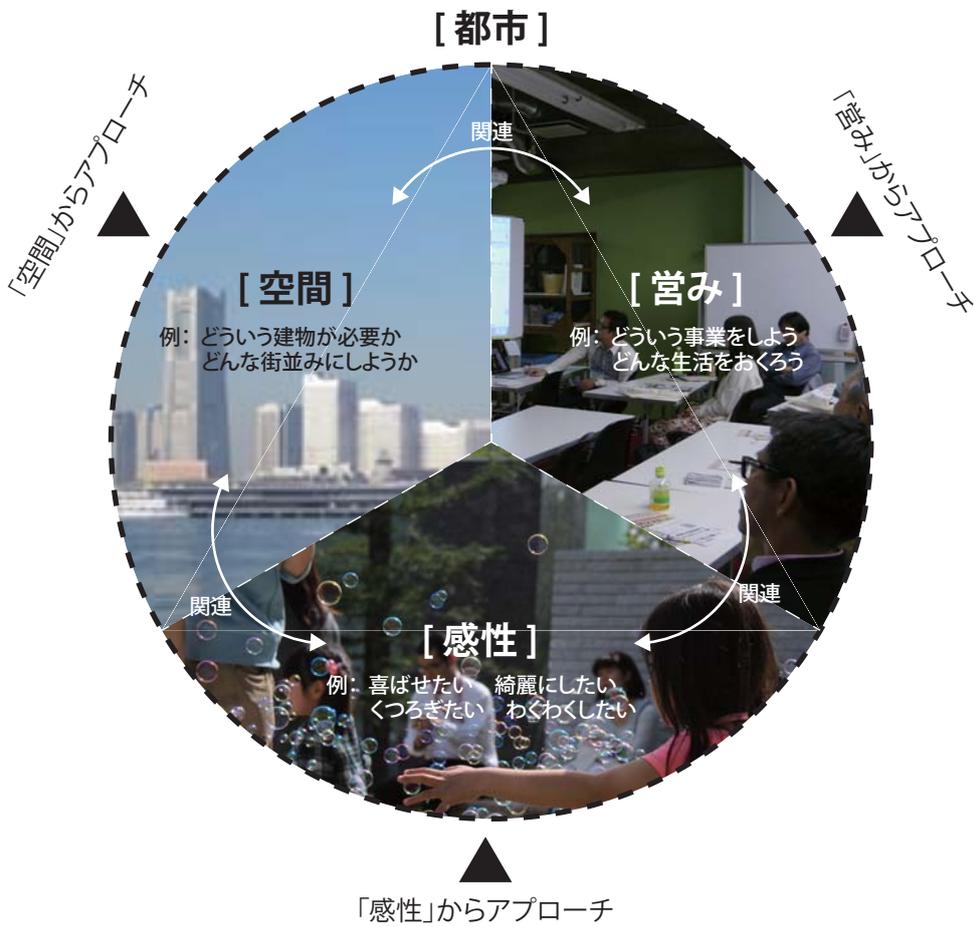
各活動には、より効果的で最適な効果が得られるアプローチがあります。空間などを整備するところから始める場合から、関わる人の思いなどから始める場合まで、各活動に都市へのアプローチの選択肢を与え、適格な課題と解決方法の発見や、最適な効果を生む可能性を与えます。

つまり3つの着眼点は都市に最適な変化を与える際の作用点とも言えます。

また、都市デザイン活動において総合性を維持することは容易ではありません。

基盤整備などにおいては「空間」に、事業や産業の構築などにおいては「営み」に、サービス産業の充実やにぎわい創出においては「感性」に、つついその活動の重心が置かれ、生まれる成果が偏ったものになるおそれがあります。しかし都市においてはそれぞれ単独で成り立つものではなく、都市全体はそれぞれの要素が相互に関連しあいながら総合的に成り立っています。そのため、活動も成果もより良い効果を生むために、できる限り総合的なものであることが求められます。

3つの着眼点を持つことは、活動と成果に総合性が与えられることになり、より理念の実現へとつながります。



—第2章—

共有する価値観

第2章 共有する価値観

2-1 価値観を共有する意味・意義

価値観を共有することは、方向性を共有することであり、自由かつ活発な活動のための約束事となり、活動に展開力を与えます。

これから都市横浜が取り組む都市デザインは、行政や専門家など特定の人や組織が提示する1つの未来像に向かうのではなく、個々がそれぞれのエリアと領域・分野でそれぞれに未来像としての風景を描きながら、長い時間をかけてその実現に向けて多くの人に取り組むものです。

そのためには、向かうべき方向性、成果が都市横浜に与えるべき価値を共有することが必要です。

また、価値観を共有することは、活動の過程で迷った際に戻ってこれるような拠り所にもなります。共有する価値観があることで、社会変化にともなう課題・問題にぶつかったとき、関わる人や活動が都市横浜の方向性を見失わず、目指す都市の実現に向かって着実に都市デザインに取り組むことができます。さらには、共有する価値観が最低限の約束事となり、個々が自由かつ活発な活動を行う原動力ともなり、都市横浜全体の都市デザイン活動に大きな展開力や柔軟性などを与えます。

2-2 都市横浜にとっての価値観

共有する価値観は、都市が保有すべき基礎的なものをより総合的にかつ質的に高めるものでもあり、都市横浜に固有の価値を与えるものです

高度経済成長の頃から都市基盤の整備に主眼が置かれてきた時代には、計画通りの建物が建設されたか、公園や道路がどれぐらいの規模で幾つできたか、といった量的な評価が重視されてきました。しかし、多様で複雑な課題やニーズに対してそれら都市基盤を使いこなし、真の意味での都市横浜とそこでの暮らしの質を向上をさせていくべき時代においては、質的な評価を重視し、その実現に向けて様々に取り組む必要があります。価値観の共有は質を重視することを意味するのです。

それはけして安全性や機能性、そしてその充実のための整備などを軽視するものではありません。しかし、これまでそれらの要素は個別に判断され、個別かつ量的に整備されることが多く、時に環境が悪化されることに繋がり、景観を損なう場合もありました。そこでこれからは、都市横浜や個々の暮らしの質の向上のための基礎的な要素としてそれらを位置づけ、それぞれの都市デザイン活動がより高い質の成果をあげるために、様々な側面と合わせて総合的に判断し、整備を最適化していくことへとつなげます。

つまり、共有する価値を高めることは、都市の基礎的要素を充実させることも含むのです。

そして、本ビジョンで掲げる「共有する5つの価値」は、都市横浜の歴史や文脈をふまえ都市横浜の特長として導いています。いわば都市横浜が培い保有する個性です。そんな価値観を共有し高めることで、都市横浜にさらなる固有の風景と価値を与えるのです。

第2章 共有する価値観

2-3 5つの価値と背景

**都市横浜がこれまで培ってきたものであり、
これからよりさらに高めていくべきもの**

創造性

人々の気質や技術、企業活動や経済的活力、歴史的建造物や景観などの地域の特徴を活かし、個々の特徴を相互に関連付け、社会の状況にあわせた先進的な価値を生み出していく、創造性のある都市

親近感

人と人、人と自然のふれあいなどの場や人々の生活・活動に呼応した快適な街並みが形成され、人々の交流や地域の活動が活発になり、新たな人やものごととの出会いが生まれる、親近感のある都市

寛容性

世代や国籍などの人の特徴、様々な住まい方・働き方、それぞれの地域の特徴などが尊重され、人々による新たな挑戦・失敗を受け入れながら発展していく、懐の深い、寛容性のある都市

有機的

人々の生活や企業・地域団体などの活動、公共施設や自然環境などの諸要素、都心部・郊外部・他都市などの多様な地域が密接に連携し、柔軟につながりながら全体として自律する、有機的な都市

物語性

地形や土地利用、場の雰囲気、街並みの様子、自然との関わり、地域の歴史などの横浜各地の特徴を見出し、地域の文脈としてつないでいくことで、愛着や誇りが生まれ、奥行きのある文化が育まれる、物語性のある都市

横浜が先進性のある都市であり続けてこれたのは、創造性がある都市だからと言えるのではないのでしょうか。多様で複雑な社会を迎えるにあたり、ますます蓄積してきた資源（歴史・文化・人・活動・施設等）を再編・再構築し、先進的で独創的な活動と成果が求められてきます。都市横浜はこれからも世界の中で創造的な都市の象徴であるべきです。

横浜は開港以来、多くの人を惹き寄せ、人口を伸ばしながら発展してきました。それは、多くの人が暮らしてみたいと思う都市であり、暮らし続けたいと思える、親近感のある都市であったからと言えます。今後、超高齢化社会、単身世帯が増加する社会を迎えるにあたり、日常的な人と人と、生活と都市との距離など、親近感の重要度が増していくと考えられます

開港以来、横浜は常に海外の様々な国・地域との結節点となり、多様な文化が出入りしてきました。「三日住めば浜っこ」。多様な人を受け入れる気質をもった都市です。成熟社会を迎え、価値観などが硬直しがちな時代において、さまざまな人や物事を受け入れ続ける懐の深い気質は都市横浜にとって大きな特長と財産となっていきます。

横浜には、多様な環境・文化・産業をもつエリアがあり、それら諸要素・諸事業が互いに連携・補完し、個性とまとまりが共存する、ダイナミックな都市として形成されてきました。この先も多くの人に住むことになる都市横浜は、ますます多彩な人材や経済活動・地域活動・社会活動が密接に連携し合い共生する、生き生きとした都市であることが求められます。

横浜は異国情緒あふれ、歴史性と現代性が共存する雰囲気から、映画、音楽、文学など、様々な物語の舞台となり、多くの人を惹きつけてきました。都市横浜が、これからも市民からそして世界の人々から選ばれる都市であるためには、横浜に暮らす人々、活躍する人々が主役となって新たな物語を紡ぎ与えていける特長をより高めていくがあります。

—第3章—

取り組み方

第3章 取り組み方

3-1 取り組み方の意味・意義

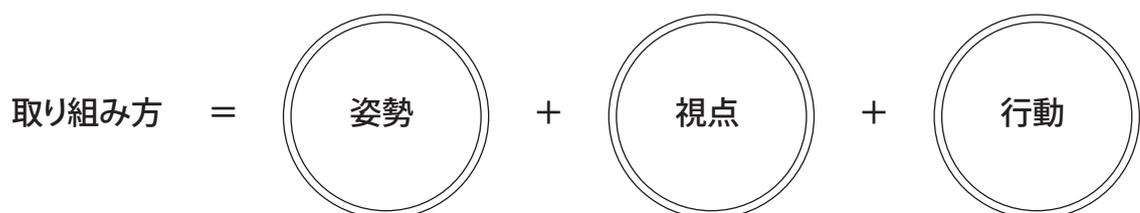
想い描かれた風景の実現のために、それぞれが適切な「取り組み方」を掲げ、役割を果たすことが重要です。

価値ある風景を想い描けてもそれは実現されなければ意味がありません。実現のためには、それぞれが自らと互いの役割を認識・理解し、連携して取り組むことが必要です。その時、それぞれが適切な「取り組み方」を掲げることは、より活動を円滑に進め、より良い成果をもたらすことに繋がります。

つまり「取り組み方」を掲げることは、取り組む際の、とるべき**姿勢**、もつべき**視点**、やるべき**行動**、を掲げることです。それらを意識し持つことで、自らが行い関わるそれぞれの都市デザイン活動において、担い果たすべき役割が明確になります。

また、それぞれの立場・分野・領域などに応じて、**姿勢・視点・取組は違います。**そのため、それぞれの人や組織、活動にとってふさわしい「取り組み方」を考え、模索し、構築していくその過程は、それぞれの役割の本質を考えることにもなります。また、それぞれが「取り組み方」を明確にすることは、互いの役割を認識することを助け、相互の活動の理解にもつながり、立場・分野・領域を横断し連携する際に有効に機能することにも繋がります。

そしてそうした、適切な「取り組み方」を自ら見出し、掲げ、互いが互いに理解し連携することは、都市デザイン活動の日常化に大きく近づきます。



第3章 取り組み方

3-2 都市デザイン行政としての姿勢



姿勢

“先導”から“舵取り”する都市デザイン行政へ

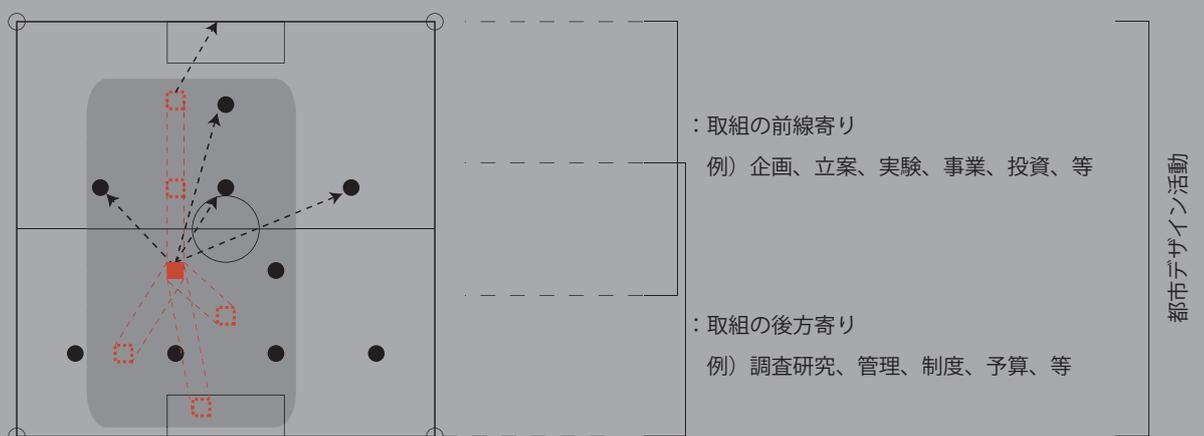
ここからは、横浜市としても、これからの都市デザイン行政（市による都市デザイン活動）が持つべき「取り組み方」、つまり、姿勢・視点・行動を提示し、横浜市が果たす役割を明確にします。

複雑かつ多様な都市の問題・課題・ニーズに対して適切な成果を生むためには、主体となって個別に集中的に取り組む人や組織のほか、客観的かつ総合的に幅広く取り組む人や組織も必要です。

これまで公共事業やまちづくりのモデル事業などを通して都市デザインの事例をつくりその有効性を伝えるために“先導”する印象が強かった横浜都市デザイン行政ですが、これからは、それぞれの地域や分野で取り組まれる活動が、それぞれでも最適な効果を上げ、かつ、都市横浜全体でみた時も最適な効果を上げるものとなるよう、幅広く総合的に関わる“舵取り”の役割を担うことをより意識していきます。

各都市デザイン活動と都市デザイン行政が互いに補完しあう関係となった時、各活動はより円滑に進み、個別の成果が都市全体の成果にもなり、都市横浜に与える風景と価値の質が上がります。

ヒント!!



中間から前線へのサポートを基本に、牽引、カバーなど、
前方から後方まで幅広く行動する

■：都市デザイン行政 ●：取組に関わる関係者
■：都市デザイン行政の役割の範囲

【都市デザイン行政の役割の範囲 模式図】

サッカーのポジションに例えると、前線の攻撃から後方の守備までをこなし、最もプレー範囲が広いボランチと言えます

第3章 取り組み方

3-3 都市デザイン行政としての視点



視点

舵取りする都市デザイン行政として重視する5つの視点

これからの都市デザイン行政は、活発な取組を促すとともに、様々な調整を通して市民の取組の質を高め、円滑に進めることができるように取り組めます。ここでは、都市デザイン行政としてそれぞれの活動に関わるにあたり、つつい当事者だけでは見落としがちな、しかし都市横浜に風景と価値を与える上で重要な視点を提示します。いわば、舵取りをする者としての視点と言えます。

都市全体を俯瞰する視点

現場から市全域までの幅広い視点を持ち、社会の状況や地域固有の特徴を読み取りながら、各都市デザイン活動が、分野横断的かつ総合的なものとなるよう、都市全体を俯瞰する視点を意識します。

様々な要素をつなぐ視点

過去から現在、子どもから高齢者、分野や地域同士、などを関連付けながら、都市デザイン活動が、互いに関係性を持ち、連続的・連動的なものとなるよう、様々な要素をつなぐ視点を意識します。

物事の本質をつきつめる視点

各活動の意味や意義、全体の豊かさから細部の美しさまでの一貫性などを確認しながら、各都市デザイン活動が、より質の高い成果を上げるものとなるよう、物事の本質をつきつめる視点を意識します

持続的な効果をもたらす視点

個々の生活や経済活動、地域社会の状況や、地球環境の変化などを慎重に見極めながら、各都市デザイン活動が、より持続的な効果や長期的な利益を都市にもたらす視点を意識します。

変化の余地をのこす視点

活動がつくる枠組みや空間などに余裕や余地をもたせ、各都市デザイン活動が、つねに新たな活力やアイデアを呼び込むものとなるよう、活動とその成果に変化の余地をのこす視点を意識します。

第3章 取り組み方

3-4 都市デザイン行政としての行動



“舵取り”として総合的に多方面から日常化に取り組みます

舵取り役としての都市デザイン行政の役割の範囲はこれまで以上に広がり、これまでの取組に新たな取組を加えていく必要があります。また、都市デザイン活動の日常化を目指す上では、都市デザイン行政に求められる役割は大きく、民間の意欲・活力を最大限に引き出すために、都市デザイン行政にしかできないこと、都市デザイン行政だからこそ取り組むべきことがたくさんあります。

ここでは、都市デザイン行政のこれからの取組を示すとともに、各取組が日常化に向けたプロセスの中での位置づけと果たす役割を示していきます。

●都市デザイン活動のノウハウを記録・編集し、手法として提供・共有する

○都市デザイン活動のオープンデータ化

各地域で取り組まれる活動を記録し、手法として編集し、オープンデータとして公開し共有する

- ・横浜都市デザインの情報発信（パンフレットやリーフレット、マップ、書籍の発行など）
- ・各都市デザイン活動の事例・検証をリアルタイムで紹介する（データバンクの設置など）

●都市デザイン活動への興味・関心をひき、能力を高めていく

○一般市民と都市デザイン活動を身近なものにする

サラリーマンから主婦、子どもや学生から年配の方まで、そして、都市デザイン入門編から上級編まで、幅広く都市デザインに触れる機会をつくる

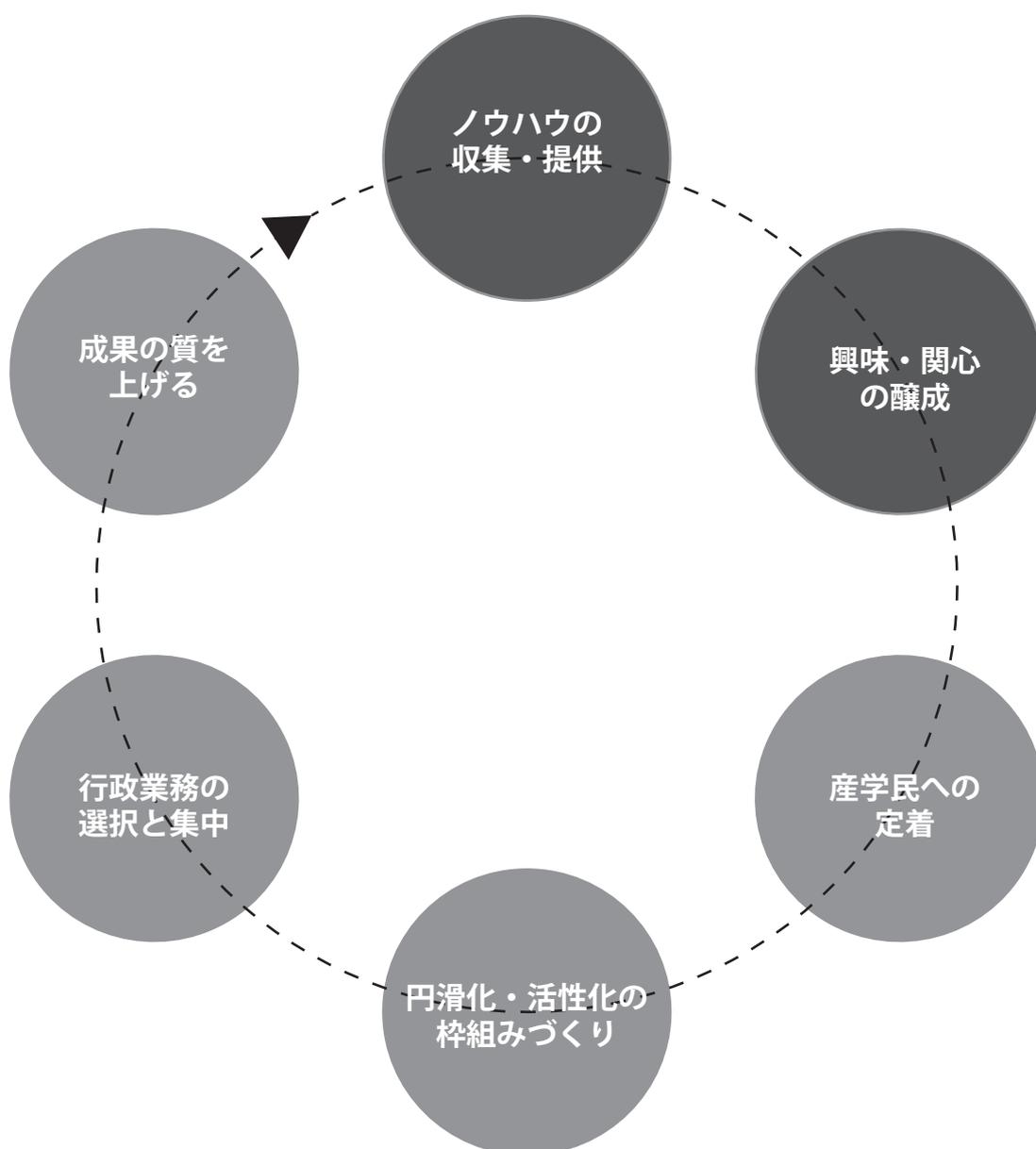
- ・関心のある人とともに学ぶ機会づくり（研究会の開催など）
- ・次世代育成が都市デザインを楽しむ機会づくり（キッズイベントの開催など）
- ・多世代で都市デザインに触れる機会づくり（ピクニックイベントの開催など）

○行政内職員の都市デザイン能力の向上

在職年数や職種を問わず、すべての横浜市職員がより都市デザインを学び、能力を向上させることができる機会をつくる

- ・行政職員が都市デザインの視点から業務を考える機会づくり（講座の開催など）
- ・最近の都市や社会事情の共有、行政内外の交流の機会づくり（研究会の開催など）
- ・都市デザイン室の専門性の向上（専門職の採用など）

【都市デザイン行政が取り組む日常化への行動 概念図】



第3章 取り組み方

3-4 都市デザイン行政としての行動つづき



行動

都市デザイン活動の日常化に向けた行政の行動 (つづき)

●都市デザインを定着させる

○産：都市デザイン事業を経済化させる

都市起業家（アーバンアントレプレナー）の育成と支援など、都市の課題や問題に対して都市デザインの観点から取り組む新規事業者が育成される仕組みをつくり、後押しする

- ・都市デザインを事業として取り組む機会づくり（スタートアップセミナーの開催など）

○学：都市デザインの研究と実践を後押しする

課題や情報提供、エリアとの橋渡しなど、研究への協力を行うとともに、研究が実際に社会で実践される場を提供し、研究活動がより有効に社会に還元されることを後押しする。

- ・都市デザインの産学連携事業など（社会実験の開催など）

○民：地域に都市デザイン活動の主権を移譲する

エリア別に都市デザイン協議会の設置などを行い、各地域のパブリックな責任と意識を持つ住民に参加してもらい、様々な問題や課題を挙げ、話し合い、行政や研究機関も加わり、論点の整理や軌道修正などを行いながら、各都市デザイン活動に主体的に取り組んでもらえるよう促す。

- ・都市デザインの視点から地域の課題などを挙げ議論する機会づくり

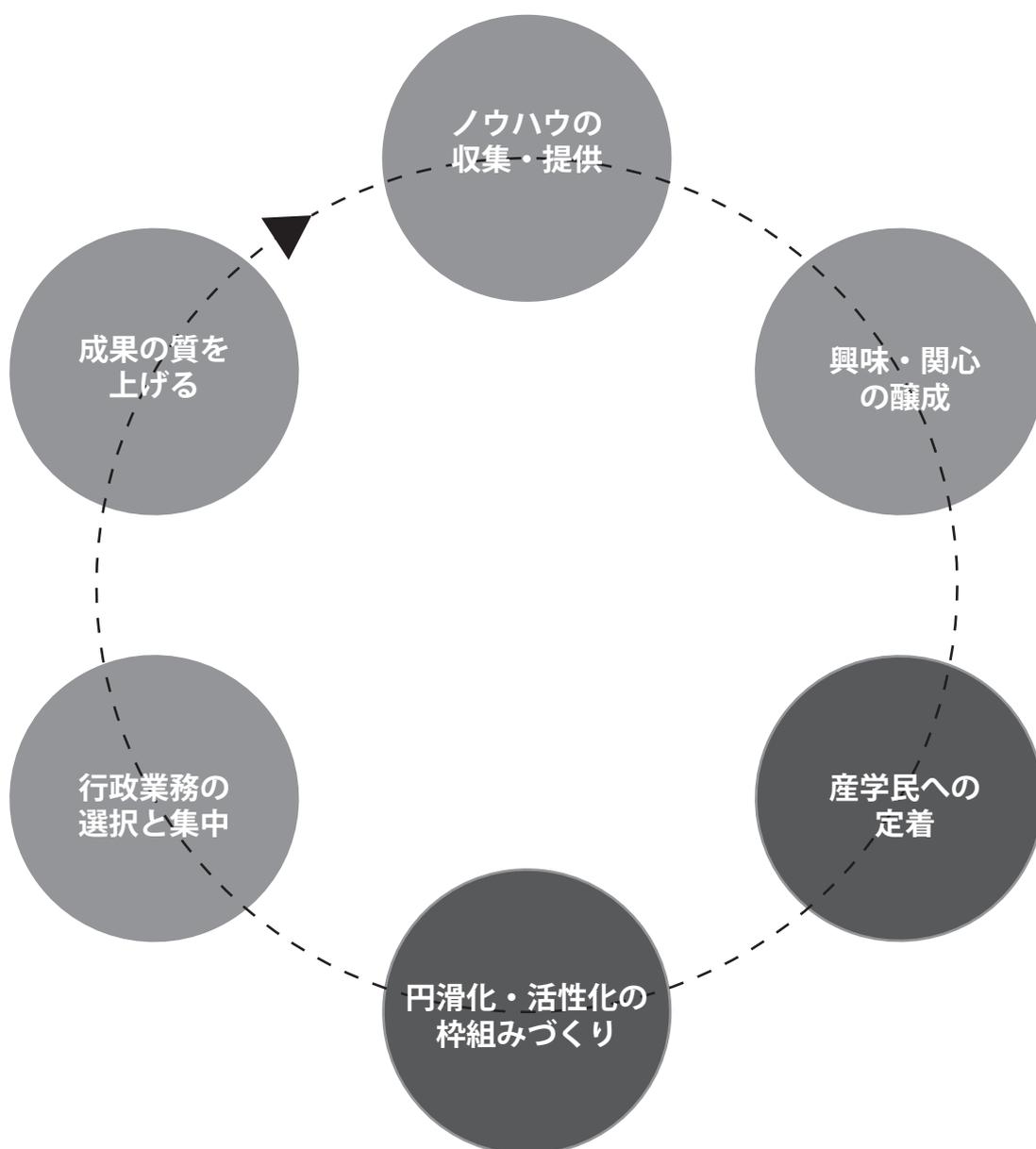
●活動が円滑化・活発化するための枠組みをつくる

○産学官民のプラットフォームづくり

産学官民が対等に議論し活動することができるプラットフォームをつくる。

- ・コンソーシアムやアーバンデザインセンターの設置など
- ・都市デザインフォーラムの開催など

【都市デザイン行政が取り組む日常化への行動 概念図】



第3章 取り組み方

3-4 都市デザイン行政としての行動 つづき 2



行動

都市デザイン活動の日常化に向けた行政の行動 (つづき 2)

●行政業務の選択と集中

○率先事業・モデル事業の実施

公共施設や公共空間の利活用など、横浜市が率先して取り組むべき事業を精査・選択し、集中的に注力する。また、新交通の試験実施や創造性ある保育拠点の整備など、社会実験性の強い事業や新たな試みなどに対して積極的に取り組み、民間に継承する

○制度運用

新たな制度を設けたり緩和したりしながら、より活動が自由かつ活発に行える土壌をつくる

○庁内体制強化

迅速かつ柔軟に市民と協働できるよう、関係各局・各部署から成る各課題や事業ごとにチームを編成し、各都市デザイン活動との連携を強化する。

●都市デザイン活動が生む風景と価値づくりとその質の向上

○各都市デザイン活動がよりよいカタチとなるようサポートする

各都市デザイン活動による影響が、都市で生活する中で、目に見えたり感じたりするなどして実感できるよう、意匠調整などを通じて具現化の精度を高める

○活動を総合的かつ継続的な事業として構築していく

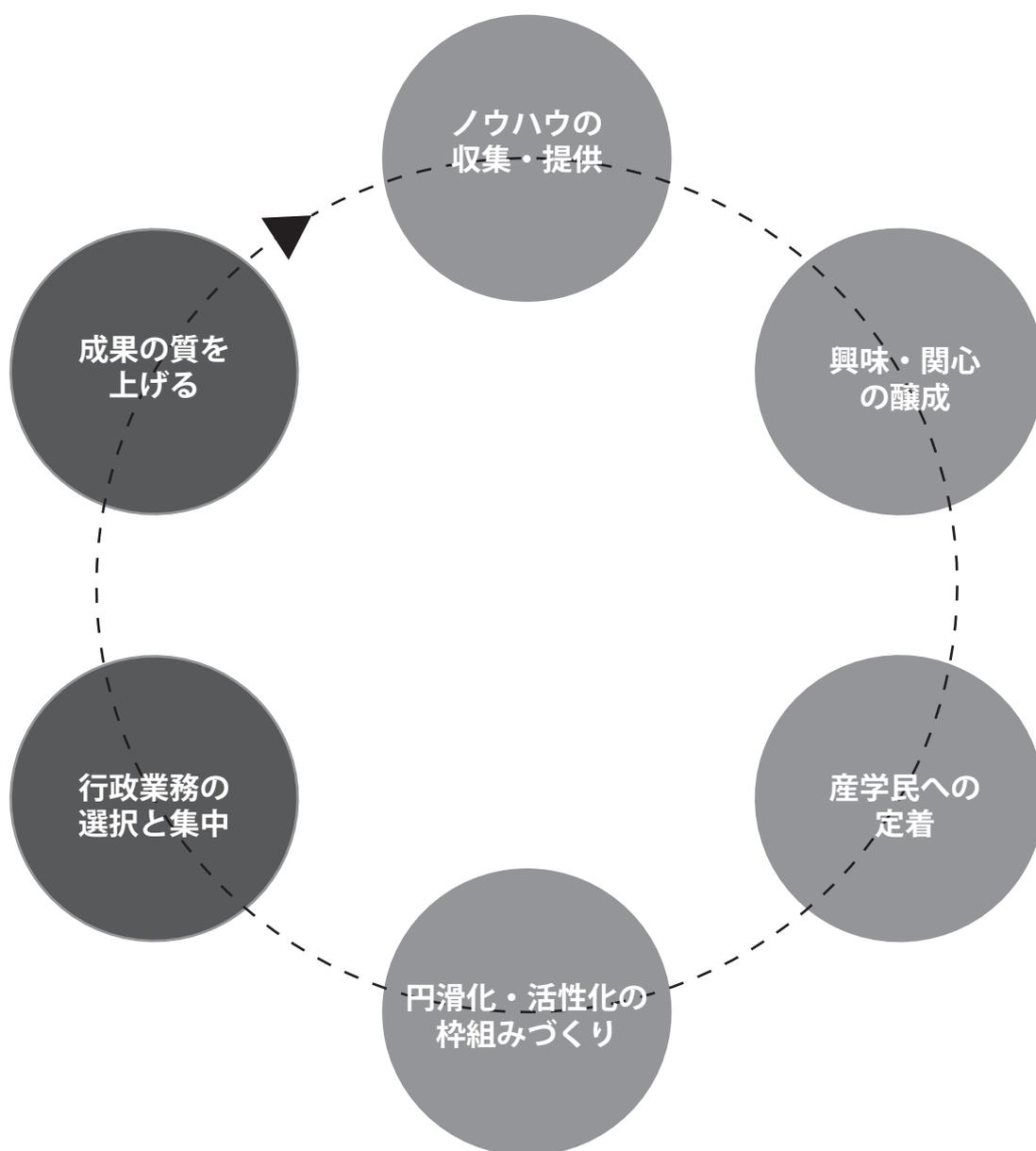
各都市デザイン活動がカタチとなった後も関わり、価値が継続的なものとなるようにする

○活動を各エリアの文化として昇華していく

各都市デザイン活動が生んだ成果や価値、そしてその活動自体が、後世に伝えられ、地域や分野の文化となっていくことを推進する

- ・文化をテーマに置き換えたまちづくりの推進など（水と緑、歴史を生かした、など）

【都市デザイン行政が取り組む日常化への行動 概念図】



一別章一

都市横浜の風景スケッチブック

別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチブックの意味・意義

横浜都市デザイン活動は「風景」を想い描くところから始まる

都市への「着眼点」を持ち（第1章）、方向性を共有するために「価値観」を共有し（第2章）、それぞれが適切な「取り組み方」を構築して（第3章）、都市デザインに取り組んだ時、成果として都市の色々な「風景」が実現し、都市に価値を与えます。つまり横浜都市デザイン活動は、都市の風景と価値をつくる活動とも言えます。

そして、その「風景と価値をつくる活動」は風景を想い描かないと始まりません。

これまでの都市の未来の風景は行政や専門家などが描き、それに従って都市デザインに取り組む印象が強く、個人としての関わりは参加程度のものであったかもしれません。しかし、都市が抱える問題・課題・ニーズが、地域や分野・立場ごとによって違いを持つものとなり、それぞれの当事者が主体となって取り組まないと、それぞれに対して最適な効果を生むことができません。

そのため、風景はそれぞれが想い描くこと、思い描こうとすること、が重要です。

この別章は、都市デザイン活動を始めるために個々が想い描いた風景を綴じて共有しておく、いわばスケッチブックです。

まずは都市デザイン行政の役割を担う横浜市が、庁内でアイデアを出し合い、あえて実現性があるものもないものも混ぜこぜの状態、スケッチブックに描き込んでみました。

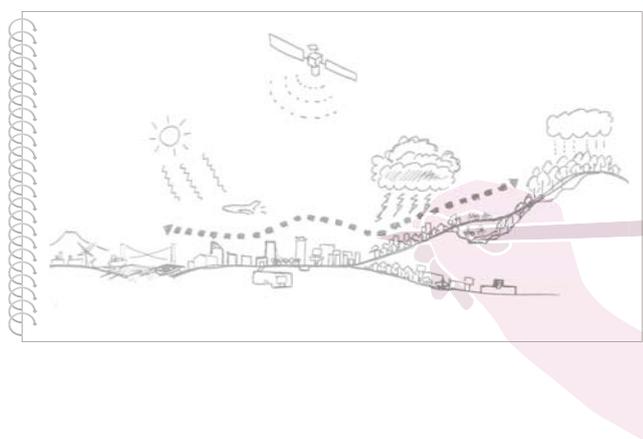
しかし、これではまだまだ行政が想像できる範囲を越えておらず、不十分です。

それぞれが、今描き込まれているアイデアをヒントに、さらに描き加えていく必要があります。

都市横浜をどうデザインするのか。都市横浜の未来の風景をどう想い描き実現していくのか。

ここまでで本ビジョンが提示した「着眼点」「価値観」「取り組み方」は、それぞれが風景を描き、実現させ、価値を生むための指針、つまりこれからの都市横浜をデザインするための羅針盤です。

それぞれが都市横浜の風景未来の「風景」を想い描き、日々のその実現に向けて主体的に取り組む状況が生まれた時、都市デザイン活動は日常化され、理念の実現にさらに近づくのです。



笑う。食べる。学ぶ。
働く。遊ぶ。深呼吸する。
生きていくうえで関わるすべてのことが、
手の届く範囲の中にある。
港と丘、文化と自然、歴史あるものと新しきもの。
時には葛藤しながらも、
様々なものをやさしく包み込み、
人が、人と、人らしく、すごせる街。
自然に、自分らしくいられる街。
そんな街で、あなたとわたしが、
出会い、認めあい、高めあう。

それは、ここに暮らす人たちが
自ら思い描いた、未来のヨコハマ。
長い歩みの中で、異なるものを受け入れ、
新たなものを生み出しつづけたヨコハマの、
もう始まっている未来。

いまと未来をむすぶのは、
開港を経てヨコハマが育んできた真の多様性と、
住みやすい環境を自分たちで創りだす市民のチカラ。
ここにしかない自由で開放的な風が吹き抜ける。
そんなヨコハマを、みんなで創りあげよう。

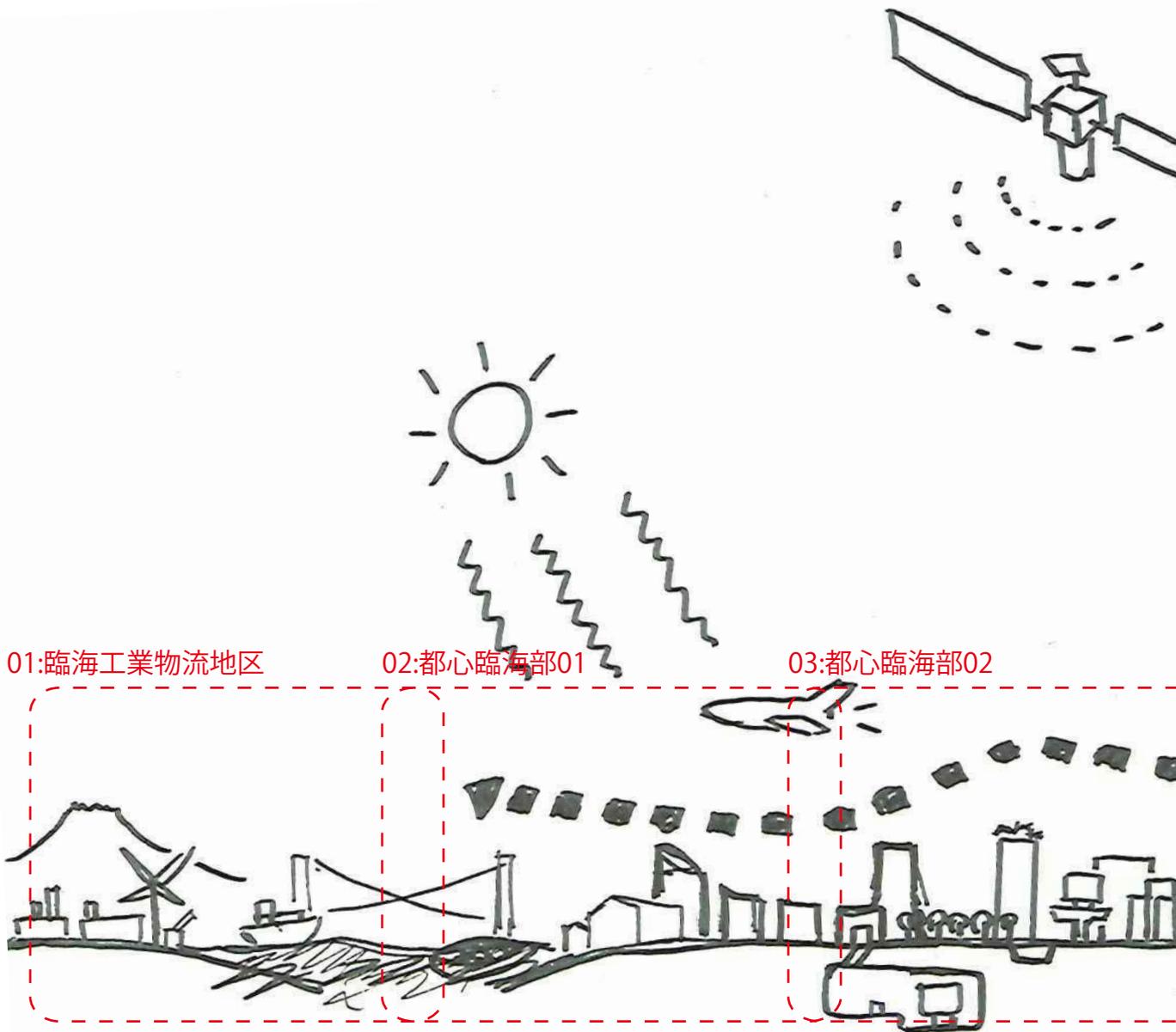
『OPEN YOKOHAMA ステートメント (横浜の未来像)』より

別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット00:都市横浜全域

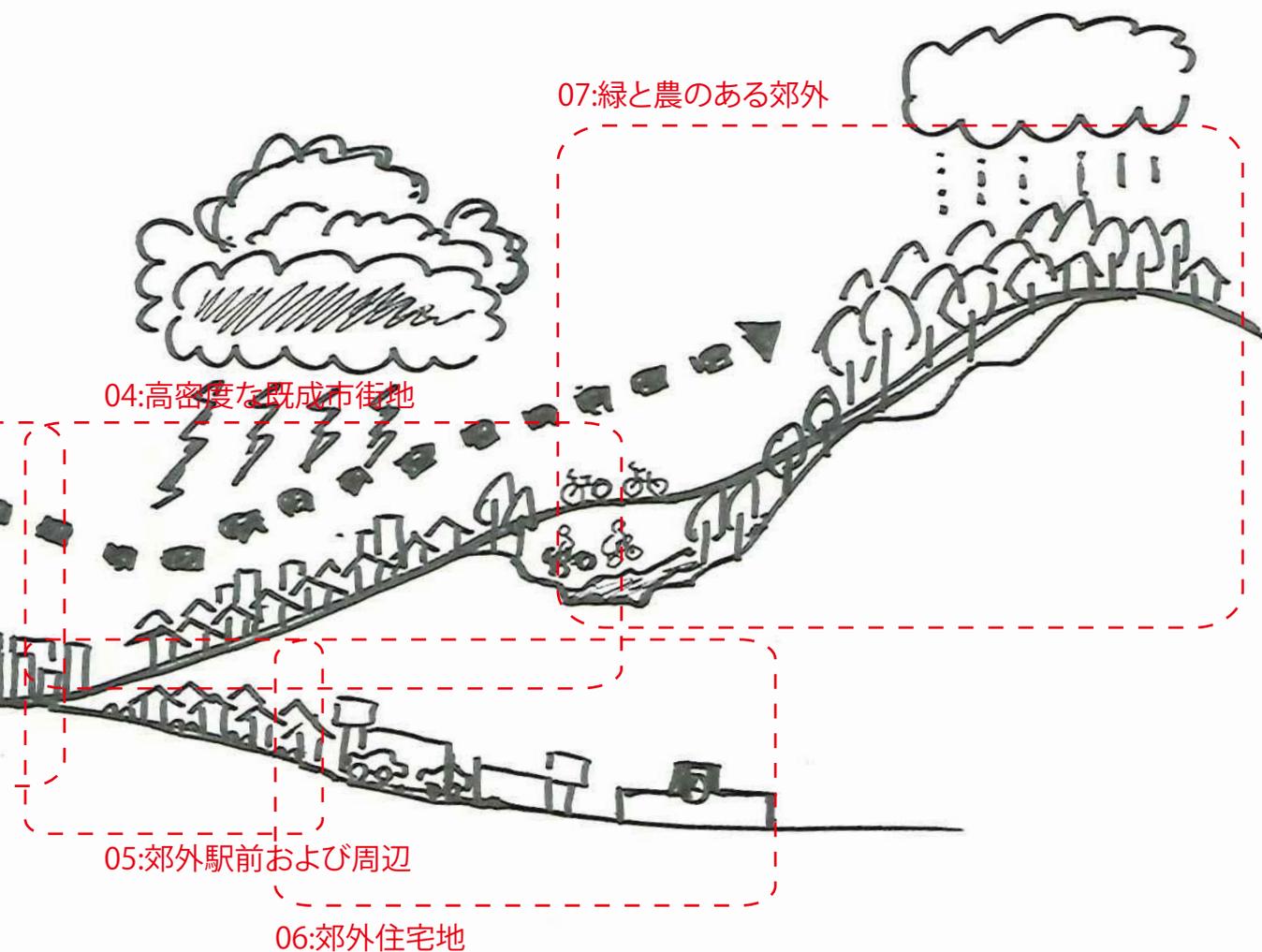
海から山までの多様なシーンを含む都市「横浜」の全域で様々な取組がなされている。また、都市全域を考慮した、緑、水、風などの自然のネットワークが形成され、市外とのヒト・モノ・コト・カネ・情報などの交流が活発に行われている。

- 地形や気候、インフラの見直しを含めた都市全体目線による
- 居住、労働、保育、介護、など多様なライフスタイルに対する
- 市域全体の独自の地形などの環境や資源を活かした環境改
- 海から山、山から海への風のルートづくりの更なる促進
- 海から河に至る水でつながる都心部と郊外の水のネットワー
- 海辺から、都市の緑地、郊外の緑、里山、まで緑が繋がる環



災害対策
都市の適切なあり方の検討
善
ネットワーク構想検討
境の更なる促進

- ・都心居住や郊外週末居住など、郊外と都心を行き来する人の流れの活性化
- ・郊外部と都心部の都市における役割の検討
- ・ビッグデータを活用した、事業活性、生活支援、災害対策などの取組
- ・観光、移住、など人の流れの活性化と適格なサイン計画による移動の円滑化
- ・貿易、国際交流、文化交流、技術移転など市外・国外との相互交流と連携関係の構築
- ・都市全体の交通ネットワークや各地域における交通手段の最適化の検討と構築

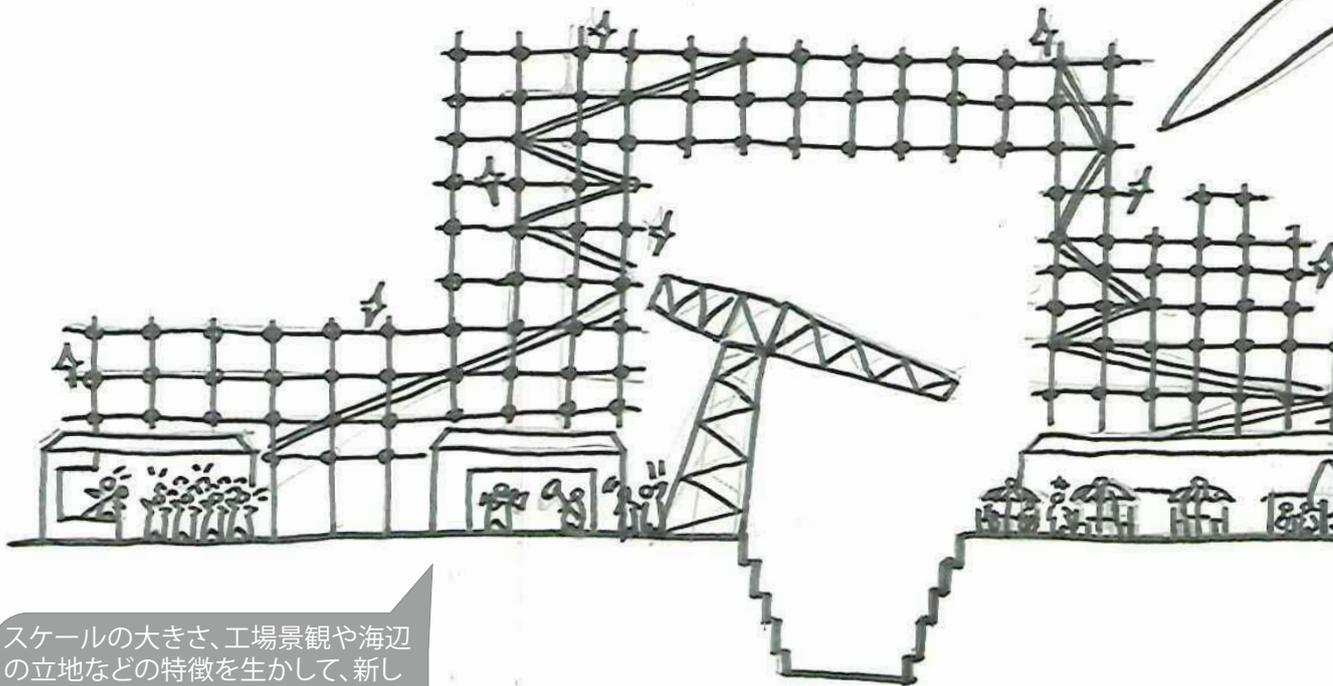


別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット01:臨海工業物流地区

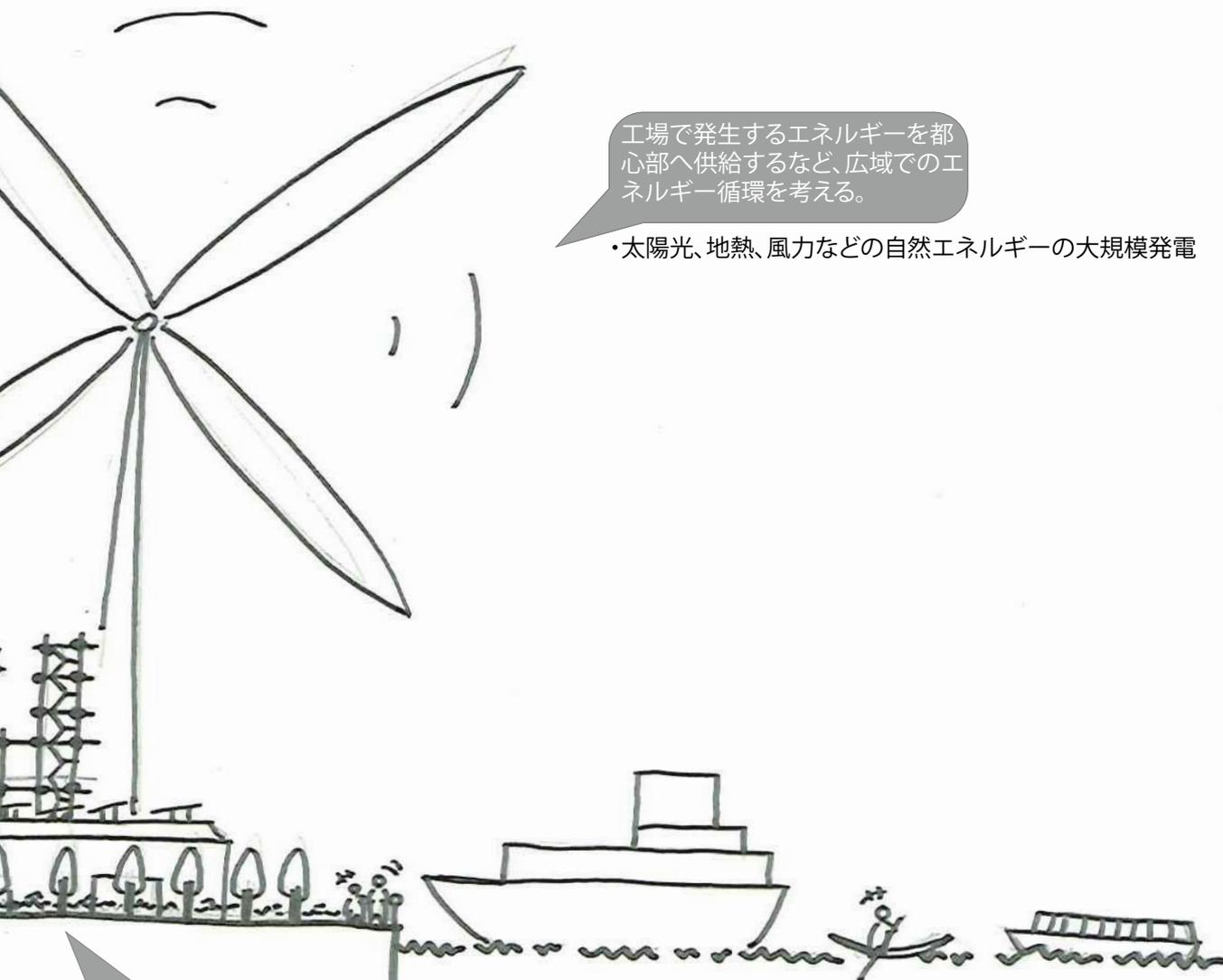
ブラウンフィールドを研究開発施設や大型商業、ここだからこそ使える土地利用などに転換し、サステイナブル・シティの実践に取り組む。

- ・大規模な土地利用転換
- ・新たな産業の創出や転換
- ・大型商業施設
- ・テクノツーリズム
- ・新たなスタイルの研究所等の誘致



スケールの大きさ、工場景観や海辺の立地などの特徴を生かして、新しいアクティビティを生み出す。

- ・工場夜景、テクノスケープ観光
- ・大規模撮影スタジオ
- ・音楽ライブ 屋外フェスティバル
- ・護岸の開放。水際線の緑化



工場で発生するエネルギーを都心部へ供給するなど、広域でのエネルギー循環を考える。

・太陽光、地熱、風力などの自然エネルギーの大規模発電

工場、事業所内の大規模な緑地をネットワークし、生物多様性の向上に資する。維持管理を従業員・市民が担うことで工業地帯に人間らしさが加わってくる

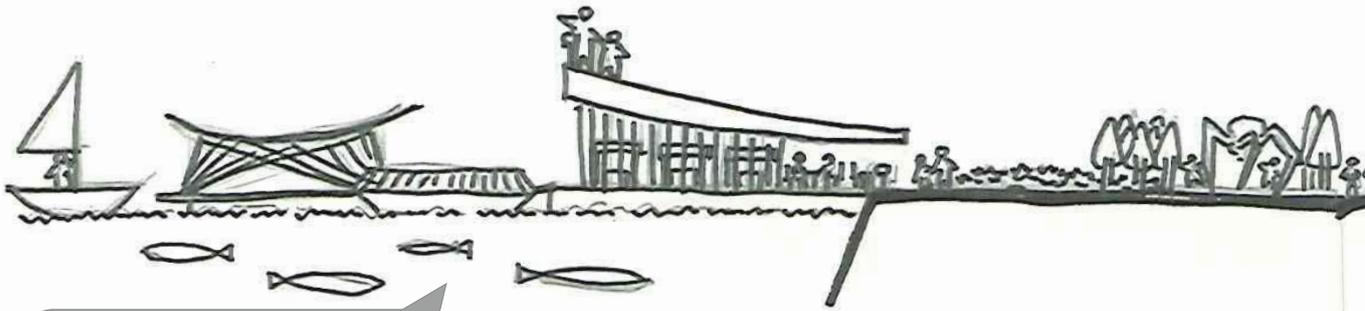
- ・ビオトープ ネットワーク
- ・京浜の森づくり
- ・災害時避難や船着き場
- ・水際線の緑化
- ・鉄道の跡地利用やリニアな形状の土地の活用

別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット02:都心臨海部01

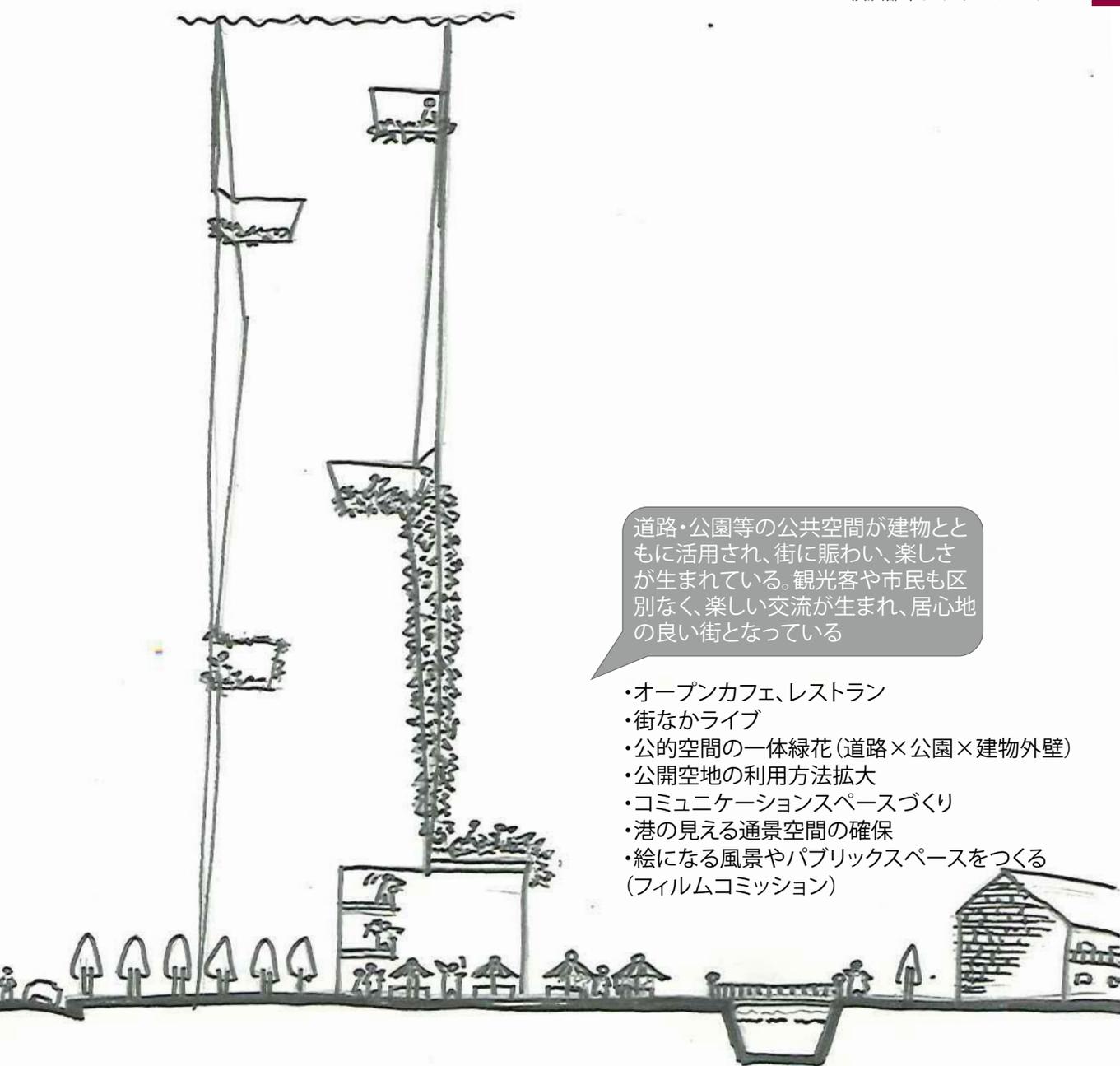
海上から見た景観を意識し、美しい港の景観をつくる。

- 水際線の積極的な緑化とオープンスペースの連続的な演出による「緑の港」景観
- 港の遺構の積極的な活用(クレーン、倉庫、工場など)
- 横浜港の代名詞となりうるシンボリックな施設
- 先進的な高層建築物デザインへの取組
(高層部の環境的取組や低層部の一般開放の促進など)
- ヨット(帆走)と大型客船が同時に見える風景
- 都心緑化
- 視点場のパブリック化



川辺・海辺の市民開放が進み、水辺が市民の日常的な憩いや観光目的地の中心となり、さまざまな体験が提供されている。

- 水際のレストラン等商業利用の推進(フィッシャーマンズワーフ、オープンカフェなど)
- 創造拠点づくりと活用。
- アートイベントや都市へのアートインスタレーション
- 水上(海上)利用の促進(水上レストラン、イベント用フロートなど)と構想作成
- 水陸両用観光バス(船)
- ヨット、カヤックなどの海上の市民解放
- 自然力を活かした水質浄化



道路・公園等の公共空間が建物とともに活用され、街に賑わい、楽しさが生まれている。観光客や市民も区別なく、楽しい交流が生まれ、居心地の良い街となっている

- ・オープンカフェ、レストラン
- ・街なかライブ
- ・公的空間の一体緑花（道路×公園×建物外壁）
- ・公開空地の利用方法拡大
- ・コミュニケーションスペースづくり
- ・港の見える通景空間の確保
- ・絵になる風景やパブリックスペースをつくる（フィルムコミッション）

歴史的景観が面的に保全され、歴史的建造物の保存・再生が進んでいる。文化・芸術・観光・MICEに資するユニークベニューとして積極的に活用されている。

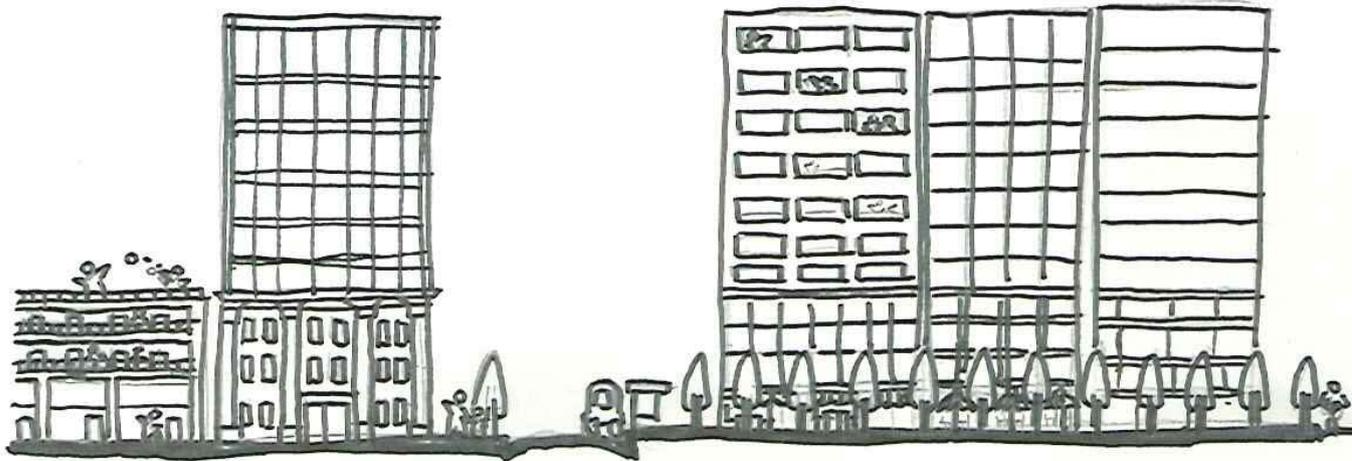
- ・多様な保全・活用手法の検討・調査
- ・歴史を生かしたまちづくり施策と観光MICE施策連携
- ・ユニークベニュー・プロモーション
- ・歴史リノベーション助成
- ・歴史不動産事業
- ・近接する建築への修景助成等の支援策
- ・歴史的建造物に観光案内拠点
- ・橋や川などの都市の自然資源的風景の活用
- ・ウェディングの似合う街並みや風景、景観

別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット03:都心臨海部02

文化・観光・レジャー・産業・都心居住等において横浜全体を牽引し、国内外の多くの人を惹きつける都市の成長エンジンとなっている。

- ・インナーハーバー整備構想
- ・都心臨海部再生マスタープラン
- ・I R、コンベンション施設
- ・市庁舎跡地、山下埠頭等の大規模な土地利用転換
- ・都心居住、職住近接によるライフスタイル
- ・足元のにぎわい創出と街並み

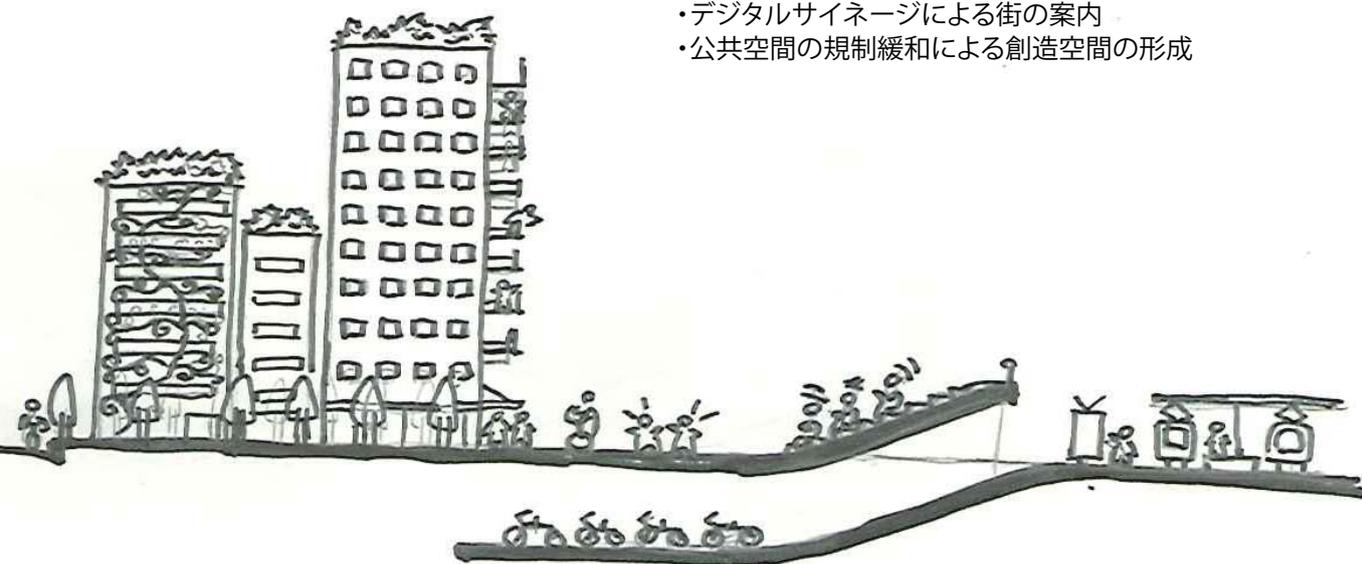


低・未利用空間やニッチな空間を個性的にデザインし、新しい使い方を挿入することで、街に新たな活力が生まれている。

- ・防火帯建築のリノベーション
- ・芸術不動産事業
- ・コミュニケーションの機会や場づくりとにぎわい創出
- ・サードプレイスづくり
- ・コインパーキングなど都市の更新時に生まれる仮使用状態の土地などの美観向上
- ・整然とした空間だけでなく雑然としつつもにぎやかな空間のあるまちづくり
- ・屋外広告物を排除・整理するだけでなく、魅力的に活かす取組

移動手段が多様化し、公共交通、シェアモビリティ、スロー交通の利用が主流になっている。人や環境にやさしく、都心臨海部をワイドに移動・観光するのが新しいヨコハマスタイル。

- ・シェアモビリティ(自転車、電気自動車、電動バイク)
- ・スロー交通(自転車、セグウェイ、バス)
- ・LRT、BRT等の新たな交通
- ・自転車走行環境の向上
- ・道路断面の再配分(歩行者×自動車×自転車×その他)
- ・デジタルサイネージによる街の案内
- ・公共空間の規制緩和による創造空間の形成



クリエイティブクラスなどを含む様々な人が住み、働く街として定着し、文化・産業・教育が活性化している。クリエイティブシティが横浜の代表的な都市政策となっている。

- ・ナショナルアートパーク構想→→文化芸術活動拠点の集積
- ・創造産業の育成、集積
- ・アートトリエンナーレ等芸術祭の開催
- ・都市空間演出(スマートイルミネーション等)
- ・再生ホテルなど創造的都市活用
- ・ウォールペイント
- ・市民スクール、起業ラボ
- ・横浜デザインフェスティバル
- ・クリエイティブディレクターのいる保育園など創造的な保育環境の整備
- ・障害のある(と一般的に社会が見る)人が自らの能力を活かして生活できる環境整備
- ・介護や育児が、孤立せず、両立でき、さらには楽しめるほどになる生活環境づくり

別章 都市横浜の風景スケッチブック

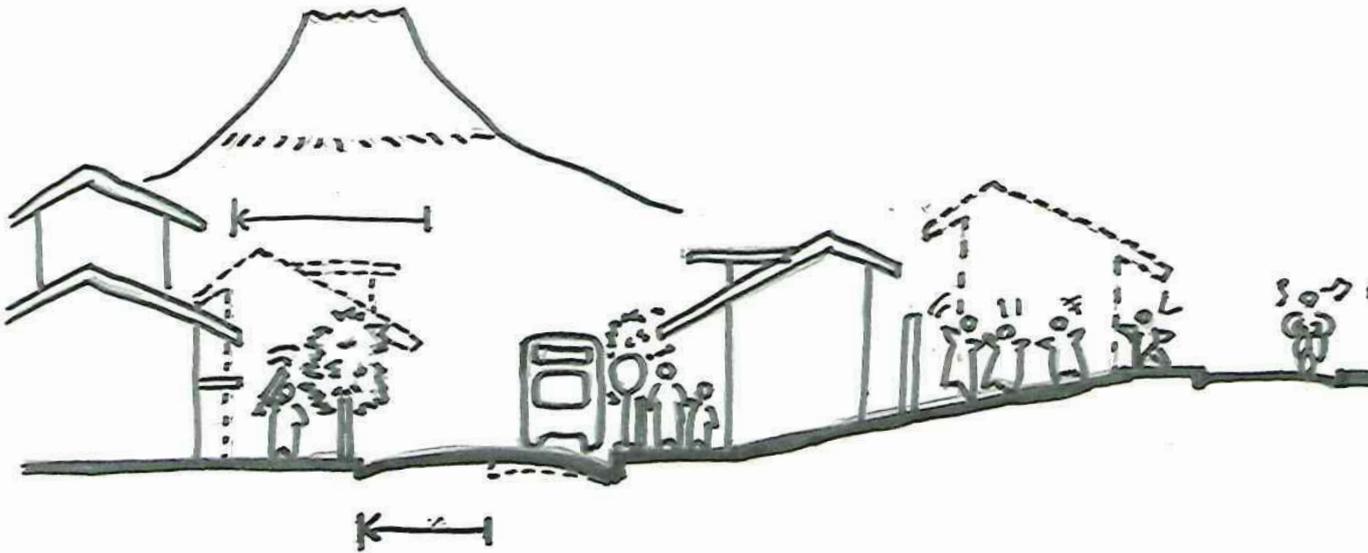
風景スケッチ カット04:高密度な既成市街地

路地性や界索性など、木造密集地域ならではの特徴を活かし、子供のための遊び場や地域住民が交流する場を増やす

- 空家の間引きによる空間のゆとりづくり
- 空き地の利活用
- 通りを挟んだまちのまとまりの形成 (区割りから背割りへの転換など)
- 空家を利用した小規模小売店舗の新規開業促進

坂道など地形を活かした景観を意識した環境がつくられている

- 富士山への眺望の確保
- 海や港への眺望
- ルーフカラープランニングなど、坂道や住宅地であることを活かした景観形成と魅力づくり

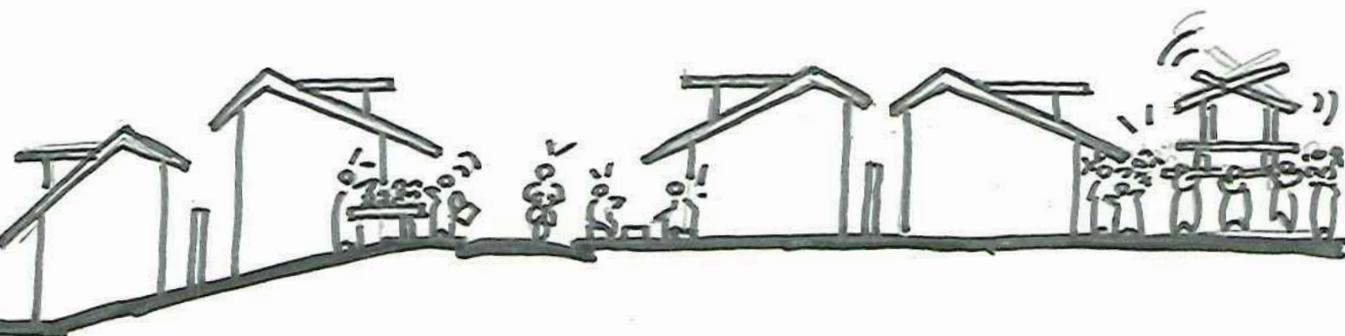


道路の拡幅や住宅の建て替えなどとともに防犯体制の確立や景観形成なども行い、まとまりあるまちとして再生されている

- 道路の拡幅と住宅のセットバック
- 防火・耐火住宅への建て替え
- 防犯パトロール体制づくり
- 地域独自の景観の形成

災害対応力を高めつつ、坂道や路地、小広場を魅力的に演出するなど、下町的風情も感じられるまちづくりが進んでいる。

- まちの不燃化推進
- まちの小広場整備
- 坂道、路地をコミュニティ醸成の場に
- 地域まちづくり推進条例

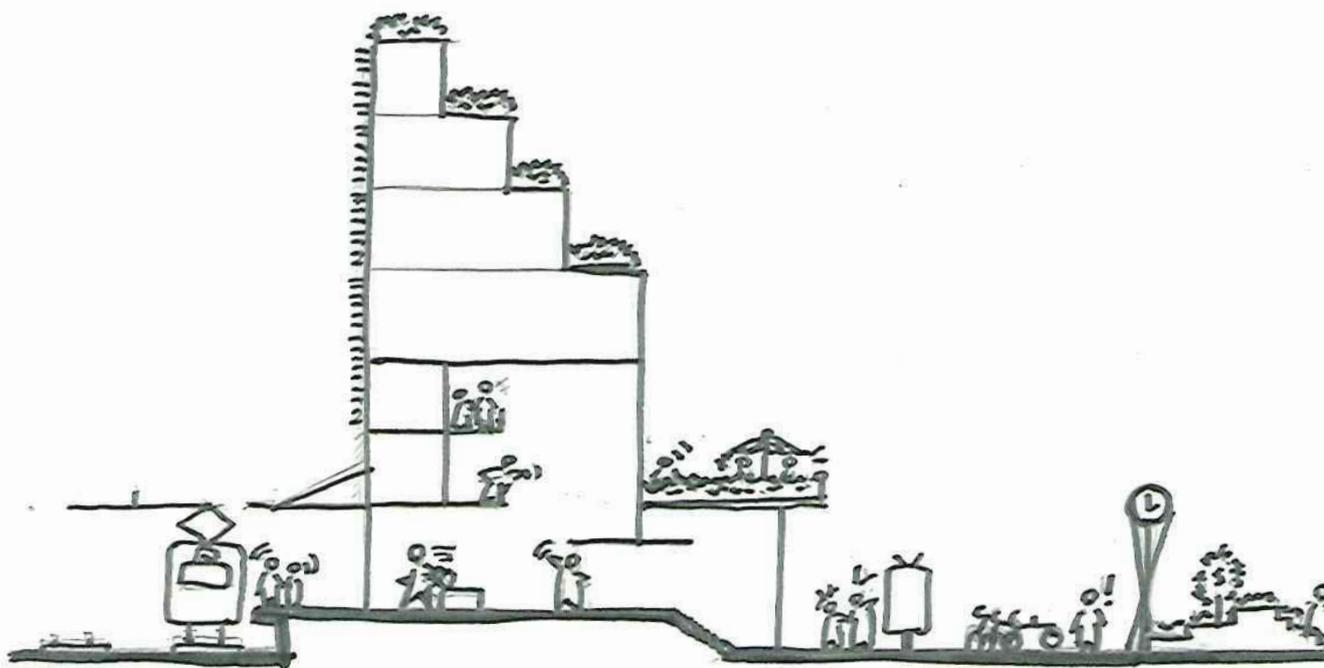


別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット05:郊外駅前および周辺

誰もが移動しやすく、簡単に施設を渡り歩けるよう、街の機能を立体的に分散させすぎない、ユニバーサルデザイン志向のコンパクトな駅周辺ができています。

- ・歩車の平面分離、歩行空間の優先
- ・駅前広場の歩行者空間化と交通ターミナルの効率的分散
- ・駅前サインやまち全体の案内など、歩行者目線のサイン計画
- ・バリアフリー化

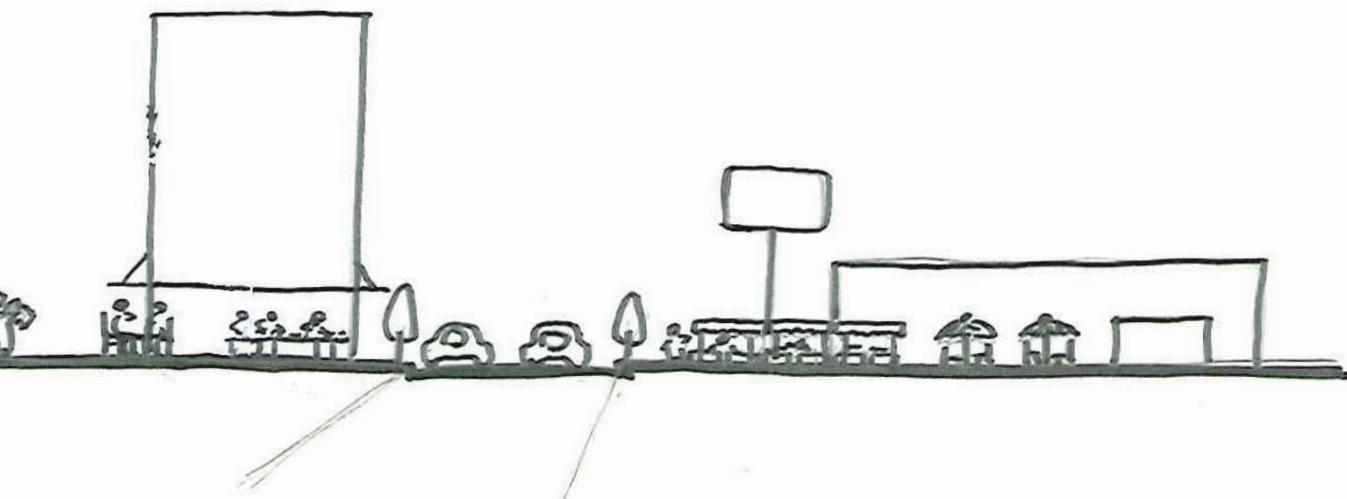


駅前に生活支援施設のほかに、地域の人々が集える広場(オープンスペース)があり、広場を中心とした豊かなコミュニティが生まれている。

- ・オープンカフェ
- ・朝市、夕市、マルシェ
- ・エリアマネジメント拠点
- ・図書館や区庁舎など公共施設のコミュニティの場としての活用

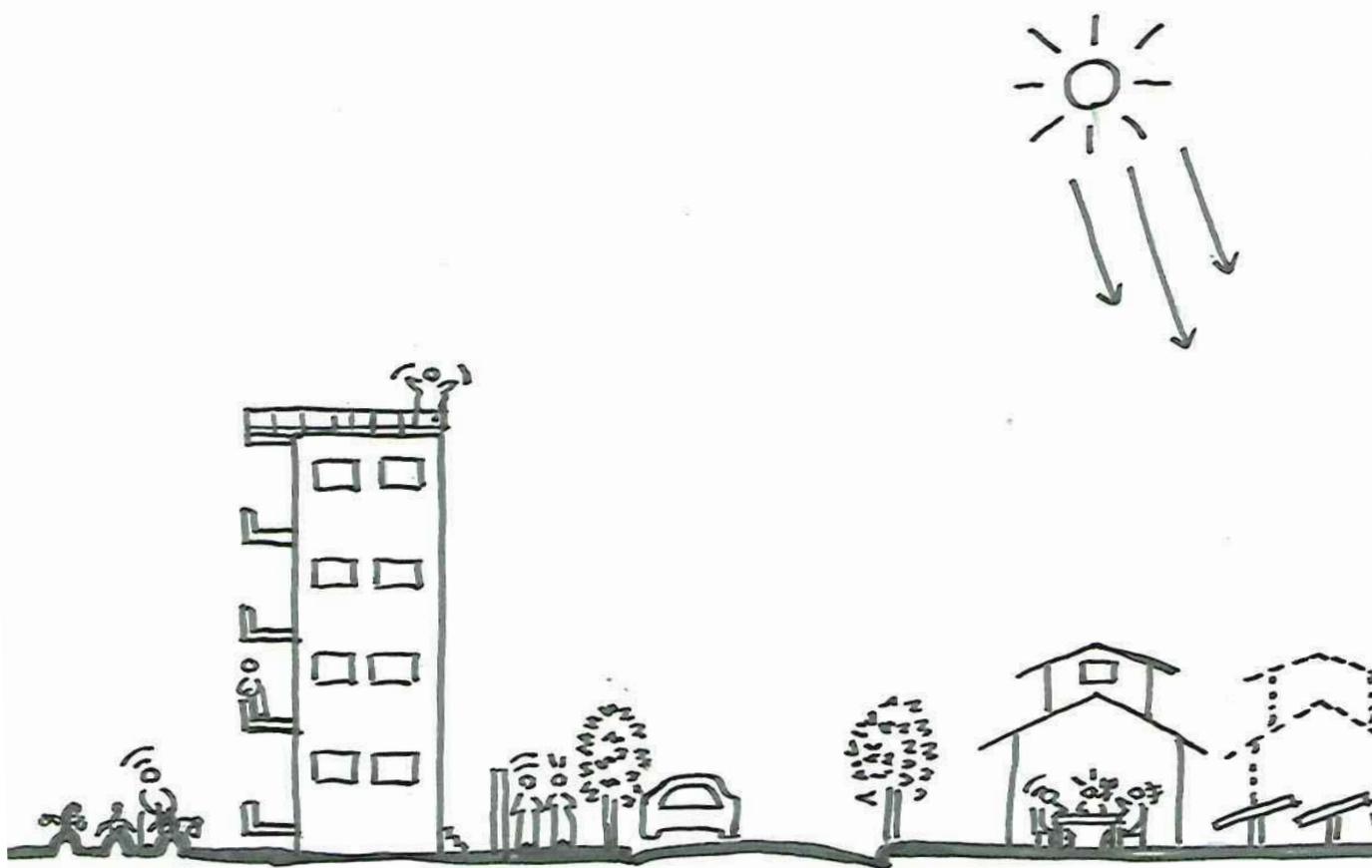
郊外のロードサイド施設が、地域住民に対しても貢献する活動を行い、不要になった施設が地域にとっての新たな拠点として活用をされている。

- ロードサイド施設の前面駐車空間を利用した市や祭りなどの開催
- 廃校が地域交流・多世代交流の施設として再利用
- 地価の低さを利用して、都心で働く必要のない業種や新規創業を、廃校や廃業店舗に誘致して活用
- ロードサイドの廃業店舗を大規模スタジオなどとして再活用
- ロードサイドの緑化やサイン計画など歩行者目線の空間に改善



別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット06:郊外住宅地



郊外ならではのゆとりある設計となっている建物や敷地の特徴を活かして、新たなライフスタイルに合った再利用がされている

- 団地のエリア全体の再生
- 空き地、耕作放棄地の活用
- 郊外住宅取得促進(税制優遇、農園付き住居など)
- 各地区にあったコミュニティ空間の形成

空家を、都心で働く必要のない人が移住してきたり、平日は都心で働く人が週末利用する住居として利用したりしている。

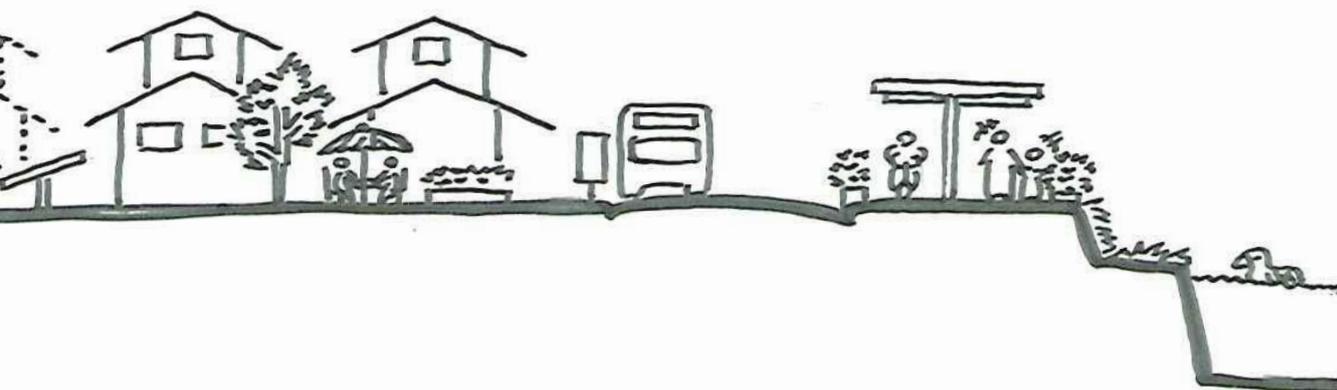
- 郊外移住計画
- 週末住宅利用促進 税制優遇

駅前より不便だが、土地にゆとりがあ
って近くに自然もあり都心にもそこそ
こ出やすい立地を生かした新しい郊
外ライフが営まれている。

- ・オープンガーデン
- ・週末住宅
- ・カーシェアリング
- ・移動スーパー
- ・空き地発電
- ・空き地菜園
- ・高齢者が外出したくなる街のしつらえ
- ・緑や景観など環境豊かな歩行者空間の形成

郊外の地域コミュニティによって、郊
外ならではのライフスタイルに合わ
せた交通システムが運営されている。

- ・カーシェアリング
- ・移動スーパー
- ・コミュニティバス

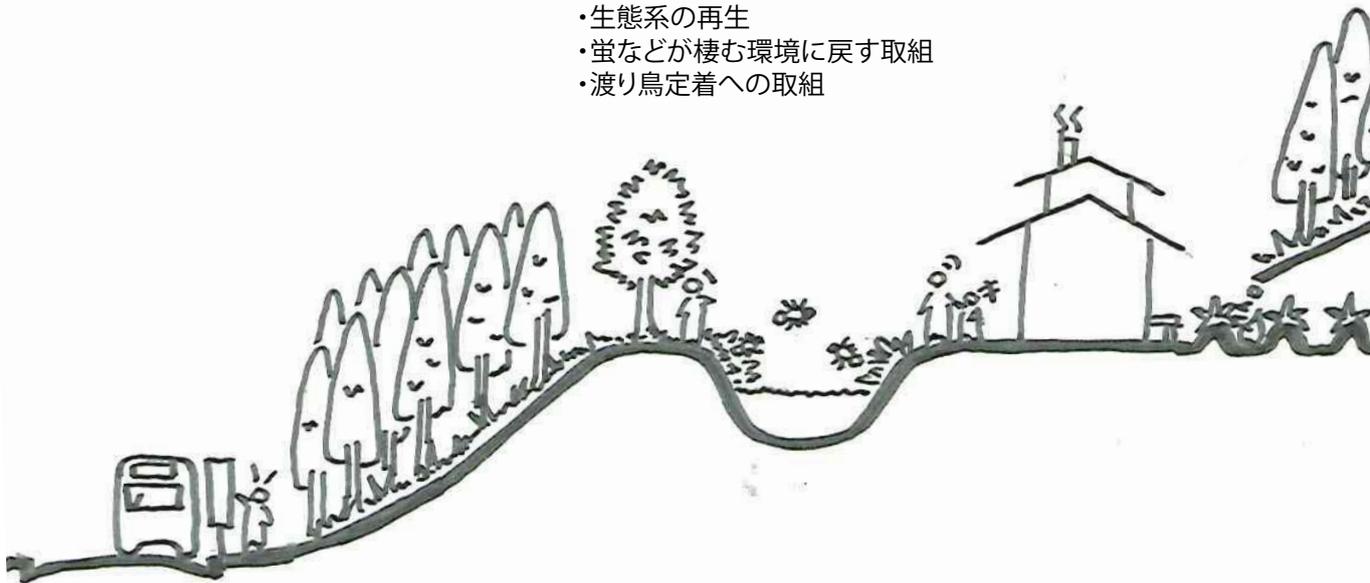


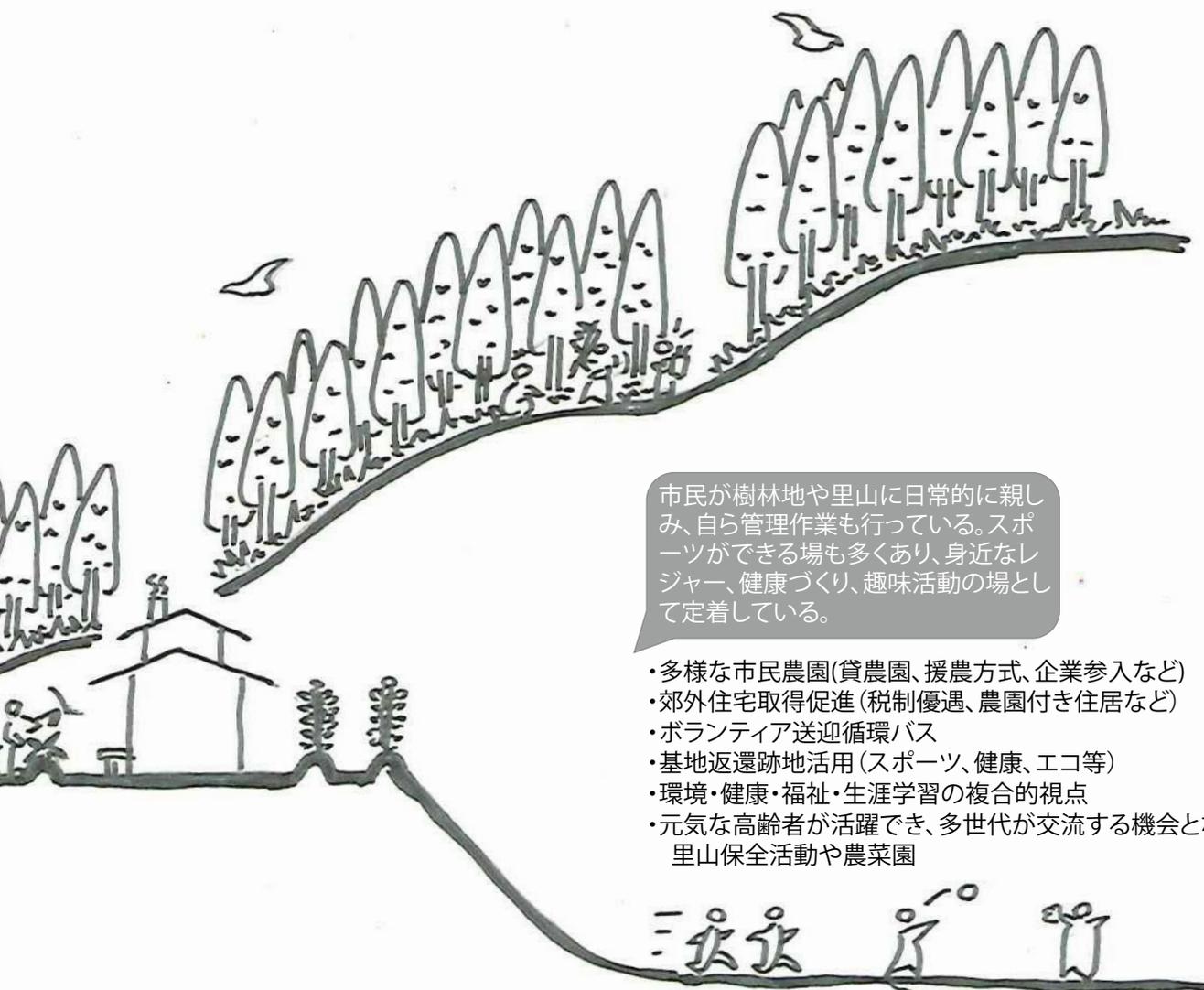
別章 都市横浜の風景スケッチブック

風景スケッチ カット07:緑と農のある郊外

鳥や虫などの生物や地形・植生と共生しながら暮らすライフスタイルを選ぶ人が移住してきている。

- ・河の再生 自然河流へ戻し、人が集まる場所へとする取組
- ・生態系の再生
- ・虫などが棲む環境に戻す取組
- ・渡り鳥定着への取組





市民が樹林地や里山に日常的に親しみ、自ら管理作業も行っている。スポーツができる場も多くあり、身近なレジャー、健康づくり、趣味活動の場として定着している。

- ・多様な市民農園(貸農園、援農方式、企業参入など)
- ・郊外住宅取得促進(税制優遇、農園付き住居など)
- ・ボランティア送迎循環バス
- ・基地返還跡地活用(スポーツ、健康、エコ等)
- ・環境・健康・福祉・生涯学習の複合的視点
- ・元気な高齢者が活躍でき、多世代が交流する機会となるような、里山保全活動や農菜園

平日は都心で暮らす人たちが空家と田畑をシェアし、週末になると菜園などをして過ごすなどしている。

- ・農業体験促進
- ・空家利活用促進 税制優遇
- ・郊外シェアライフ促進
- ・地産地消
- ・クラインガルテン化

—付録—

付録

横浜都市デザインをもっと知る

**横浜都市デザインには長い歴史と事例があります。
これまでや今を知ることができる様々な資料をご紹介します。**

本ビジョンだけでは「横浜都市デザインとは何か」「横浜都市デザインはこれまで何をしてきたか」などはご紹介・ご説明することができません。ここでは、これから都市デザインに取り組もうとする方々がより詳しく横浜都市デザインを知りたい際の助けとなる資料を紹介します。

◆都市デザインマップ：『YOKOHAMA URBAN DESIGN MAP』（2015年作成）

まちを歩く際には欠かせない持ち物である地図。横浜には既に様々な地図がありますが、この地図は横浜都市デザインに特化した地図です。これがあれば横浜都市デザインを巡ることができます。

→→→ 都市デザイン室にて配布

◆都市デザインリーフレット：『URBAN DESIGN YOKOHAMA』（2012年作成）

都市横浜の特徴的な場所や取組を取り上げ、横浜のまちを楽しくする工夫とそのかさなりを紹介するリーフレット。普段から目にする横浜の風景の背景を知ることができる、入門的資料です。都市デザインマップと一緒に持って回れば、より楽しく都市横浜を巡ることもできます。

→→→ 都市デザイン室にて配布

◆都市デザイン概要パンフレット：『横浜の都市デザイン』（2014年作成）

横浜における都市デザインについてダイジェストで17ページほどにまとめられています。上記リーフレットよりもさらに詳しく横浜の都市デザインについて知ることができます。

→→→ 都市デザイン室にて配布

◆本ビジョン参考資料：『横浜都市デザインビジョン 別紙』

上記概要パンフレットをベースにした横浜都市デザインの概要と、現在の時代・社会状況への考察を加え、本ビジョン本編では詳しく触れていない事柄について、参考資料として添付しています。

→→→ 本ビジョンに添付

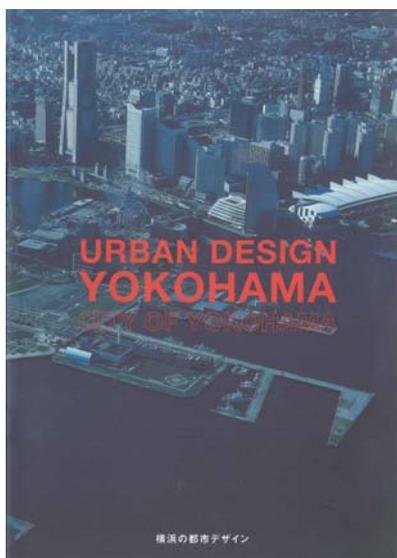
その他、都市横浜の形成過程を知ることができる『港町横浜の都市形成史』や都市デザイン室のWEBなどの横浜市が発行するものから、都市デザインの専門家が横浜都市デザインについて解説・論述されている書籍などまで、他にも多数資料があります。 →→ 書店、図書館やインターネット等で検索



都市デザインマップ



都市デザインリーフレット



都市デザイン概要パンフレット

●検討経過記録

- 2014年 4月 都市美対策審議会より提言
 - 2014年 4月 横浜都市デザインビジョン検討開始
 - 2014年 6月 第8回都市美対策審議会政策検討部会にて審議
 - 2014年 9月 第9回都市美対策審議会政策検討部会にて審議
 - 2014年12月 第10回都市美対策審議会政策検討部会にて審議
 - 2014年 2月 市民意見募集 ビジョンワークショップ開催
 - 2015年 3月 都市美対策審議会にて承認
- ※策定以降もビジョンワークショップは開催予定

●検討体制

●庁内検討経過記録

2014年11月～2015年3月 庁内関係各部署との意見交換・議論実施（各1回）

実施部署：都市整備局 企画課 景観調整課 地域まちづくり課
市街地調整課 防災まちづくり課 都心再生課
MM21推進課 都市交通課

環境創造局 ○○課
道路局 ○○課
港湾局 ○○課
建築局 ○○課
文化観光局 ○○課
健康福祉局 ○○課
政策局 ○○課

2014年 4月～2015年 3月 都市デザイン室内議論実施（30回100時間程度）

※策定以降も庁内意見交換。議論は実施予定

横浜都市デザインビジョンーこれからの都市横浜をデザインするための羅針盤ー

企画・編集・デザイン 横浜市都市整備局企画部都市デザイン室

発行 横浜市

印刷 ○○

発行年月日 2015年○月○日



市民意見募集について

今回の市民意見募集では、本ビジョンの内容への感想・ご意見を募集します。また、皆さんが思い描く「風景」とその実現に向けた「取り組み方」の投稿も歓迎します。頂いたご意見や投稿は、本ビジョン策定の際に参考にさせていただきます。

※「風景」や「取り組み方」については本紙裏面またはホームページ上の本編をご覧ください。

ビジョンに対するご意見をお寄せください。

【意見募集期間】 平成27年●月●日（●）から●月●日（●）まで
（郵送の場合は、当日消印有効）

【応募方法】 次のいずれかの方法で提出してください。

- ① ハガキ〔切手不要〕（下のハガキを切り取り、ご使用ください。）
- ② FAX：045-664-4539 都市デザイン室あて
- ③ 電子メール：tb-toshidesign@city.yokohama.jp
- ④ 持参：都市デザイン室まで

【注意事項】 いただいたご意見は、個人情報を除き公開される場合があります。また、電話でのご意見の受付及びご意見への個別回答はいたしませんので、あらかじめご了承ください。

キリトリ線

ハガキ見本

ハガキ（切手不要）付きのパンフレットは、下記の場所で配布しています。

- ・都市整備局都市デザイン室（市庁舎6階）
- ・市民情報センター（市庁舎1階）
- ・各区役所広報相談係
- ・行政サービスコーナー等

■よろしければ、あなたについて教えてください。

【年齢】 歳代 【居住区】 区

■あなたの関わっている都市デザイン活動やまちづくり活動はありますか？差し支えなければご記入ください。

※いただいたご意見は、個人情報を除き公開される場合があります。また、電話でのご意見の受付及びご意見への個別回答はいたしませんので、あらかじめご了承ください。

ご協力、ありがとうございました。

都市デザイン

PRリーフレットについて

この「横浜都市デザインビジョン（案）意見募集」のリーフレットは、平成26年7月に発行した都市デザイン室のPRリーフレットに挟んで配布している場合があります。（一部を除く）
入手を希望される方は、都市デザイン室までお越しください。



横浜都市デザイン室
URBAN
DESIGN
YOKOHAMA

お問合せ先

横浜市都市整備局
都市デザイン室
横浜市中区港町1-1
（市庁舎6階）
TEL 045-671-2023
FAX 045-664-4539
city.yokohama.lg.jp/toshi/design/

これからの横浜を デザインするための羅針盤 横浜都市デザインビジョン（案）【概要版】

資料1-2

意見募集

平成27年●月●日～●月●日



自分の豊かな生活を思い描くこと
それが都市デザインの原点です。

都市デザインって何？

「魅力と個性のある人間的な都市」の実現を目指して

都市デザインの定義は様々ありますが、横浜にとっての都市デザインは、「魅力と個性のある人間的な都市」の実現に向けて、都市を様々な面から総合的に捉えて風景と価値をつくっていくことです。

横浜は、高度経済成長期の頃から都市デザインに取り組み、横浜固有の風景と価値を生んできました。地域で地域のシンボルツリーを守ることや歴史的建造物を活かしたまちづくりから、ベイブリッジやみなとみらい地区などスカイライン・景観の形成などまで、都市デザインの取組は幅広いものです。

横浜都市デザインは、行政や一部の専門家のみが取り組むものではなく、都心部のみのためのものでもありません。横浜に関わる全ての人々が主体となって、横浜市全域において取り組むものです。また、一部の分野に限ったり、短期的な成果を求めるものでもありません。様々な立場・世代・分野を横断し、長期的に捉えて取り組むものです。

全ての人

市全域

領域横断

長期的視野

なぜ都市デザインビジョンをつくるの？

時代は刻々と変化しています。少子高齢化や産業構造の変化、環境問題や防災まで、複雑かつ多様で多岐にわたる問題が増え、様々な場面でこれまでのやり方や考え方だけでは通用しないことが増えています。横浜の都市デザインも時代の変化に合わせてそのやり方や考え方を整理しなおして取り組む必要があります。そのために、みんなで共有する都市デザインビジョンが必要です。

【ビジョンとともに目指すこと】

それぞれが都市横浜の未来の「風景」を思い描き、その実現に向けて積極的かつ持続的に取り組んでいる、そのような状況をこのビジョンとともに目指します。

||

本ビジョンでは「都市デザイン活動の日常化」と呼ぶことにします。

本ビジョンは、皆さんと共有する羅針盤です。

1 都市への着眼点／第1章

「風景」を想い描くにあたり、何を風景に書き込むと良いのか。都市の捉え方は様々ありますが、本ビジョン第1章では、都市を構成する要素として「空間」「営み」「感性」を挙げて、その重要性を説明しています。



感性

働きたい 住みたい 訪れたい
楽しい うれしい 心地いい
好き 驚き・・・

営み

働く 住む 事業 生活 会話
清掃 移動・・・

空間

建物、道路、公園、港、
樹林地・・・

2 共有する価値観／第2章

「風景」を想い描くとき、その風景がまちや都市に実現するとどう良いのか。または、何のためにその風景を想い描き、実現しようとするのか。本ビジョン第2章では、これまで都市横浜が培い、そしてこれからも高めていくべき価値として5つ挙げています。この価値を共有し、風景の実現に向けて取り組むことで、都市横浜の魅力はさらに向上します。

創造性

人々の気質や技術、企業活動や経済的活力、歴史的建造物や景観などの地域の特徴を活かし、個々の特徴を相互に関連付け、**社会の状況にあわせた先進的な価値を生み出していく、創造性のある都市**

親近感

人と人、人と自然のふれあいなどの場や人々の生活・活動に呼応した快適な街並みが形成され、人々の交流や地域の活動が活発になり、**新たな人やものごととの出会いが生まれる、親近感のある都市**

寛容性

世代や国籍などの人の特徴、様々な住まい方・働き方、それぞれの地域の特徴などが尊重され、**人々による新たな挑戦・失敗を受け入れながら発展していく、懐の深い、寛容性のある都市**

有機的

人々の生活や企業・地域団体などの活動、公共施設や自然環境などの諸要素、都心部・郊外部・他都市などの多様な地域が密接に連携し、**柔軟につながりながら全体として自律する、有機的な都市**

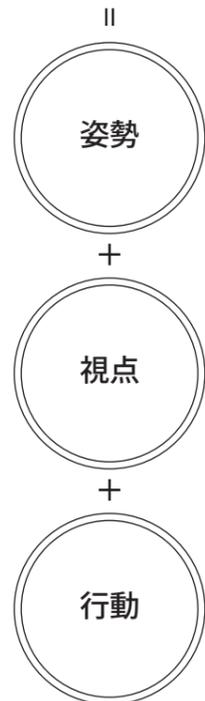
物語性

地形や土地利用、場の雰囲気、街並みの様子、自然との関わり、地域の歴史などの横浜各地の特徴を見出し、地域の文脈としてつないでいくことで、**愛着や誇りが生まれ、奥行きのある文化が育まれる、物語性のある都市**

3 取り組み方／第3章

想い描いた「風景」を実現するにはどうすればいいのか。本ビジョン第3章では、実現のためのポイントとして「取り組み方」(姿勢、視点、行動)を掲げ、それらを自ら構築し、役割を明確にする重要性を説明しています。都市デザイン行政としても、自ら横浜市の「姿勢」「視点」「行動」を掲げ、説明しています。

取り組み方



横浜市の場合

◎姿勢：先導から舵取りへ

これまで事例づくりによって有効性を伝える「先導」の印象が強かった都市デザイン行政ですが、これからは、それぞれの活動が都市横浜にとって最適な効果を上げるよう、幅広く総合的に関わる「舵取り」の役割をより意識します。

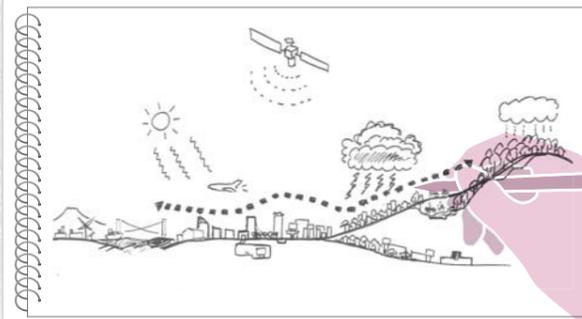
◎視点：舵取りする5つの視点

つつい当事者だけでは見落としがちで、しかし都市横浜に風景と価値を与える上で重要な視点を提示します。
都市全体を俯瞰する／様々な要素をつなぐ／物事の本質をつきつめる／持続的な効果をもたらす／変化の余地をのこす

◎行動：日常化に向けた行政としての行動

ノウハウの収集・提供／興味・関心の醸成／産学民への定着／円滑化・活性化の枠組みづくり／行政業務の選択と集中／成果の質を上げる

風景スケッチブック／別章



「横浜都市デザインビジョン(案)」の本編の別章では、横浜市が描いてみた将来の都市横浜の風景のスケッチが記載されています。

みなさんそれぞれも風景を描き、取り組み方を考えてみてください。

【都市デザインビジョン(案)の詳しい内容について】

「横浜 都市デザインビジョン(案)」本編に詳しい内容を記載しています。
都市デザイン室(市庁舎6階)、または都市デザイン室ホームページ等でご覧いただけます。
都市デザイン室ホームページ
<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/design/>

1. ビジョンについて共感できる場所、重要だと思う場所、ご意見のあるところ等をお書きください。

第1章 第2章 第3章
別章 全体

2. 都市デザインに関して、あなたが取り組みたいことがあれば、ご自由にお書きください。

第9回 横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録	
議題	(1) 今後の都市デザイン行政について ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて(審議)
日時	平成26年9月5日(金) 午前10時00分から午前12時00分まで
開催場所	横浜市庁舎 5階 関係機関執務室
出席者(敬称略)	委員: 西村幸夫(部会長)、佐々木葉、中津秀之、六川勝仁、国吉直行 書記: 小山孝篤(都市整備局企画部長)、綱河功(都市整備局都市デザイン室長) 事務局(資料説明者): 小野田哲郎(都市整備局都市デザイン室)
欠席者(敬称略)	
開催形態	公開(傍聴者2名)
決定事項	・「ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて」は、継続審議とし、審議会からの意見をふまえ作成を進める。
議 事	<p>議 事</p> <p>(1) 今後の都市デザイン行政について ア (仮称) 横浜都市デザインビジョンについて (審議)</p> <p>市から資料1に基づいて説明を行った。</p> <p>○西村部会長 今年度中にまとめて、どこかで公にするのか。</p> <p>○綱河書記 今年度中にとりまとめる予定。</p> <p>○西村部会長 年度の後半でパブリックコメントなどの手続があるのか。</p> <p>○綱河書記 市民意見募集という形になる。11月ぐらいに市民意見募集を行い、年内1月ぐらいにはまとめという予定だったが、今は年度内にまとめる予定。</p> <p>○西村部会長 後ろの章はまだこれから加筆されるということか。</p> <p>○綱河書記 第4章は加筆します。</p> <p>○西村部会長 第3章は文字だけになっていて、第2章は絵が多いが、スタイルは大体このような形になるのか。</p> <p>○綱河書記 第3章までは今のところ大体こういう形の予定。</p> <p>○西村部会長 提言からかなり変わっているが、こういうスタイルにするのがいいという議論になったのはどういう経緯か。</p> <p>○綱河書記 ビジョンというからには都市像のようなものを示したほうがいいのではないかと議論があった。そこで議論したが、長期の-spanを見ていくと、1つの都市像という形で描いていくのは難しい。不確定な要素とか、いろいろと複雑な時代の中で、将来像というものは絵としては描きにくい。そこでまとめ方としては、価値観を共有するという表現にした。提言をベースには踏まえつつも、価値観を強調するのだったら、それにふさわしい言葉とか組み立てに変えるように作業した。</p> <p>○西村部会長 議論するのは細かい中身というよりも、こんな大枠とこういう考え方でいいのかどうか、それから一つ一つの中身に関して、これは抜けているのではないかとかなどでよいか。今後アクションプランというをつくるので、そちらで具体的なことに関して議論するというのでよいか。</p> <p>○綱河書記 こういう組み立てとかこういう価値観の打ち出し方というようなところについてご意見をいただきたい。</p> <p>○国吉委員 提言では、都市デザイン活動のこれまでのような総合性みたいなものを大事にすべきだなどの内容が結構あった。それは提言としては良いが、市民向けに見せてもあまりぴんとこない。それよりも具体的にどういう都市デザイン活動によってまちがどういうふうになるのだというのが見えるようにしたほうが良い。だから提言は行政の活動に対するものになるが、ビジョンとして書くには、市民が期待するまちづくりに対応する活動とした方が良い。そういう視点では、第1章、第2章、第3章があまりうまく関係していないように感</p>

じる。

都市デザインを始めたころも、新しい時代に合ったニーズを先取りして、提案してプロデュースしていくことが都市デザインだったと思う。その価値観、その活動は今でも変わらないのではないかと思う。提言で、これまでのように総合性を発揮し、時代のニーズに合った価値観を先取りして、都市の魅力を高めていくということを言っていた。そのために総合的に各局と調整したり、抜けているところを補ったりしていた。必ずしもフォワードばかりやっているわけではなくて、受け身のサポート、ディフェンスをしながら途中から攻めに切りかえていくとか、そういうことも多分やっていた。そういう意味では、最初の第1章でいきなり守り高めるということだけを言っていて、これだけ見ると守りが前面に出てきており、今までの価値を維持することが中心になっているかなという、勘違いするような表現に見える。第2章のところは育てる、創造するという言葉で、都心臨海部ではこういうこととか、郊外部ではいろいろ出てきているが、常に守りがここで先に来ているから、何かつくるのではなくて守ることがメインみたいな感じに見えてしまう。時代に合ったニーズを探って、それを高めるということにウエートを置いた方が良く、守りを前面に出すのは良くないのではないか。第2章のこの絵も第1章のところの言葉使いとは合っていない感じがする。第2章も、まだ足りないことがたくさんある。もっと活動とか、ハードだけではないですよと言っているところから出てくるものがもっと散りばめられて良いのではと感じる。

○**綱河書記** 日本の中で横浜は都市デザインを先駆けてずっと進めてきたという、いわゆる老舗の味のようなものをこれからの時代も受け継いでいかなければいけないと考えたため、第1章で守り高めるという言い方をしている。これは過去のいろいろなプロジェクトを室内でずっとレビューしながら、そこではどんなことを大事に取り組んできたのだろうというのを見て、それも踏まえて新しいものを加えている。言い方としては、守り高めるということだけで表現してしまっているのだから、伝わりにくくなっているのだと感じた。

○**国吉委員** あと、第1章のところの冒頭に「これからの都市を考えるにあたって」とあるが、ロングスパンのこれからと、短期的なこれからと、長期的な戦略に基づく対応と、短期的な対応と、両面持つというのが感じられる表現のほうが良いと感じた。

○**西村部会長** 例えば7ページの図を見ると、「これまでの都市づくりのアプローチ」プラス「これからの都市づくりのアプローチ」ということで、今までのことを尊重した形になっているが、文章を読むと、第1章は新しいこれからのことだけが出ている感じがする。

○**中津委員** 今室長から老舗という話があったが、私は老舗のプライドこそないほうが横浜らしいなという気がする。常にパイオニアというか、常に何かをつくり上げるということで、過去にやったことはさて置きみたいなものが行間ににじみ出ているほうが、結果的には老舗ののれんを守るというか、結果的には次世代の都市デザインの全国のリーダーになっていくのではないのかという気がする。攻撃が最大の守備みたいな発想のほうが私はいいかなという気がする。

先程の議論にもあったが、この「はじめに」をもうちょっと深く書いたほうが良いという気がする。後の各論を補完するような言葉の定義づけをもうちょっとこの「はじめに」のところで行ったほうが良いと思う。具体的には、「都市「横浜」」というのが市民にとって一番誤解しやすいフレーズだと思う。A3の一番初めに、富士山もあり、山もあって、雲から雨が降っているという、この絵が「都市「横浜」」なのだということをちゃんと言葉でここに入れておかないと、一番初めのページをめくった瞬間に、「都市「横浜」」というフレーズが出てきた瞬間に、このA3のページに行く以前に「あ、また港のことをやっているんだな」というとらえ方がされるとしたら残念だなという気がする。領域的な、都市部から郊外と言うべきかわからないが、山とか、そういうものを含めて都市の非常に重要な構成要素だという、そのエリア的な宣言が1つ。

それと領域間のコラボレーションということが都市を考える上で最も重要なことなのだという事も宣言すべきだと思う。空間だけではなくて、社会福祉とか、教育とか、土木的なことも当然だが、領域間の広がりみたいなところを含めて都市デザインだということが、今までやってきたことと変わるのだというようなことを、「はじめに」のページにきっちり

と押さえた文言を入れておくことが必要という気がする。全体を通して、ここがきっちりできていれば、後のほうは問題ないと思う。各論的にここをどうしたら、こうしたほうがいいのかと、細かいことはいっぱいあるが。また、ここ（「はじめに」）に何かもうちょっとわかりやすい図が欲しい。サッカーの戦略図を入れるならここにどんと入れてしまうぐらいの勇気を持ってほしい。役所内でどういう反発が出るのかはよくわからないが、こここそ勝負かなという気がする。

○西村部会長 「はじめに」をきちんとやると。それからアクションプランが後であるのだったら、それとこれとの関係みたいなものがないと。ここを読む人はこの後何があるのかわからないから、確かに全体図はもうちょっとあったほうがいいのかもかもしれない。

○佐々木委員 私は、課題に新しくもっとチャレンジしていくというようなことを、具体的に宣言するということがあってもいいのではないのかなと思う。例えばこれだけ都市デザインを進めていくということをやっているのであれば、都市デザインという産業をちゃんと横浜につくりましょうというようなものがあって良い。市民がいろいろと頑張っているというのではなくて、都市デザインで食っていける人間をもっとつくろうとか、実際にデザインするときには、「ここをレンガでやりたいよね」、「そのレンガはオーストラリアから輸入するの?」とかみたいに。もっと横浜の地域の中で、そういう素材とか職人さんとかを育てて、都市デザイン産業というのが、ハードもソフトも含めて、横浜の都心部だけではない、郊外で農業をやる人たちもある意味都市デザイン産業になるのかもかもしれないなどの、そういう明快な宣言みたいなものがあってもいいのではないかと。

例えば開発圧力が来るから、効率だけを考える開発を抑えて、そこに人間性を入れようという、そう簡単な構図で今の社会問題を解決できないというのはわかる。だが、例えば貧困だったり、自殺してしまったり、いじめで悩んでいる子たちが、健全な社会の中のコミュニティーの感覚を養えるようなところを、パブリックデザインでちゃんと解決していく、そういうところとしてオープンスペースがあるとか、パブリックスペースがあるとかということも明快に宣言してもいいのでは。そういう困っている人を助けるための都市デザインであるとか、何か目標の旗印ぐらいはあってもいいのかなという気がする。

○六川委員 私は市民委員という立場なので、そっちの観点から意見を言いたいと思う。まず、中津先生から「はじめに」をもうちょっとしっかりしたほうが良いという話があったが、横浜はこういう都市ビジョンを持って、こういう都市づくりをするのだと、もっとシンプルにわかりやすく伝える必要があるのではないのかと思う。もっと心の通った指針を示すような部分があってもいいのではないかと思う。

それと、市民と共有とか、市民の都市デザインの取り組みを支えるとかとあるが、具体的に都市デザイン室がどういう役割を持って市民と接していくのだという部分はない。そこが実は市民側から見ると非常に大事な部分かなと。前回の議事録でも、「デザイン室はどこにでもかかわれるような位置づけだ」と思う。私の印象としては大分、昔と変わってきているように感じる。例えば馬車道のまちづくりをやった当時は、デザイン室が中心になって各局が全部連携して準備を進めていった経緯がある。しかし最近は、縦割りになりつつあって、横に入れるのでしょ、入り方が限定されているように思う。いい意味でいえば細分化だが、やはり都市デザイン室の機能を担っている人たちが入っていかないと、結果としてよいものが出てこない」という意見を言っているのですが、そういう部分が市民をターゲットにした場合、すごく大事なので、その部分を表現したほうが良いと思う。ビジョンをこういう形でアシストしていくのですよ、そういうセクションは都市デザイン室が担っていきますよという部分がないといけない。確かに行政の中も再編されて、いろいろなセクションが分けられてしまったという経緯があるが、市の行政の中でも情報を共有するとか、そういう部分もすごく大事ななと思う。前回、臨海部ばかりに視点が当たっているという話をしたのですが、今回は郊外部にも結構視点が当たっていて、そういった意味ではよく変わっているのではないかと思う。

○西村部会長 例えば物をつくっていく、細部をこだわって、細部に力を発揮することで、全体に対して世界を見せるみたいなこともあり得る。そこにいろいろな部局を引き寄せて、

あるすごくクオリティーの高いものをつくらせてしまう。そういう部分もこれから先も必ず必要だし、それがなくなって何か、市民の方の感性があればそれに寄り添っていきますみたいなことだけだとよくないのではないかと思う。今までの仕事はこれまでどおりそれなりにやるし、頑張りますということが背景にあるのではないかとは思いますが、新しいところばかり書いていると、少しずつ失われかけようとしているコアで持っているものをやっぱり頑張らないといけないというところが、あまり見えないのではないかと思う。7ページに、これまではこうだったけど、新しいのはこうで、両方だと言っているのだから、こういうふうに書いていることが文章でもきちんと書かれて、それなりにやることはやらないといけないと思う。そここのところをもうちょっと頭のところで表現したほうがいいのではないかと思う。

それから、サッカーの例えが私はすごく違和感がある。野球みたいにフィールドで役割があって、野球の中にサッカーのボランチみたいなものを入れるような感じではないかと思う。

○国吉委員 他都市からの横浜の都市デザイン室に対する期待感みたいなものが結構あり、最近も松本市が来て、「今年、松本市に都市デザイン担当ができました。ご指導ください。」と。(松本市は) 次の一手をどう打つかという課題があるが、景観だけではなくて、都市交通、まちづくり、土地利用、都市計画と、景観も含めて総合的に取り組む都市デザインという認識である。都市デザインというのは形のところにどこかでシフトはするが、他の取組みとうまく調整しながら、人材育成を行ったり、空き家の活用をしたり、庁内の他の部局がやっているところと連動しながら都市をつくっていったりする視点があるという期待感を持って接してくれている。その辺は我々も認識しなければだめかなと感じる。

○六川委員 行政の中の組織も変わってきているので、今後の未来を見据えた都市デザイン室のあり方という部分もある。大枠の総論の部分はちゃんとチェックするけれど、各論はもう各局でやりなさいよというフローに落ちてきているのだと思う。ただ、そうなる情報が入らない。ルールだけつくって、それにのっとってやっていけばいいのだという立場に都市デザイン室がいるような気がしてしょうがない。だから昔のいい部分である経験則を捨ててしまうのはもったいない。

○佐々木委員 だんだん協議型でやりづらくなってきている世の中に対して、協議というフェイス・ツー・フェイスで、人間と人間の信頼関係の中でやっていける仕事のやり方をどう再生できるか。都市デザインというのはそこに帰着してくるような気がする。どうしてもルールとか、平等性とか、アカウントビリティとか、そういうことに縛られてしまっていて、市民自身もそういう感覚にどンドンなまってしまっていると思う。だからそこをもう少し小さな単位の中で自己決定して、みんなで自分の地域をどうしていくかという、小さな自治力みたいなものを都市デザイン活動を通じて再生していくというのはとても重要なと思う。

あと、7ページの「これまでの都市づくりのアプローチ」と「これからの都市づくりのアプローチ」とあるが、これまでの都市づくりのアプローチのときは、この感性のことを考えていなかったわけではない。そこでどういうふうな、それこそ馬車道を人がどう歩いていて、どんなにぎわいが生まれるかというのを、多分都市デザイン室の方もイメージを持っていた。それを実現する空間とかというものを、まだその時代はあまり人が見たことがなかったから、空間をつくるということを進めてきたということで、これまでの都市づくりのアプローチが空間ありきで、感性が後でという意味では多分ないのではないかと。進め方の中でどちらを先に目標像として描いていくかというときに、歩道に自然石が張ってあったりする道というのはあの時代にそれこそなかったわけだから、それをつくることによって、人々がこういうまちの雰囲気を楽しめるよという感性に訴えてきた。今はそういう手法とか空間というのはある程度メニューがそろってきているから、さらにその上でどういう感性を描くか。でもこの感性は描くのは難しい。描けるのであれば、感性像というものを描くのはいいと思うが、何かみんなで和気あいあいと楽しくやっている風景はもう既にかなり場面的にはあるではないか。でもそれではない、さらにもっと目標としなければいけない感性とはどんなものなのかというのが共有できるのか。

○六川委員 このフローはちょっと違う。感性が頭にあった。

- 佐々木委員 みんなあったと。当然あったからいろいろとやっていた。
- 中津委員 これまでの都市づくりからこれからの都市づくりのアプローチにスイッチするのではなくて、バトンが渡っていくようなイメージかなと思う。今言われたように、感性が後で、感性が先でというのは、どちらか何とも言えないが、ある意味、感性は人で、空間とかは空間だとすると、その結果もう一回人に戻っていくところまで踏み込むことが重要なのかなという気がする。空間が上で人が下だったのを、人が上で空間が下になったけど、その下にもう一つ、人のまちに対する愛着だったり、そういうものに戻っていくというようなものになるならば、住民発意で始まって、空間ができて、それが住民に帰っていくというようなものになるのでは。それが本当は過去のことも含めてループしていくイメージの絵がかければいいかなという気がする。
- 国吉委員 どちらかというとは最初は専門家の感性みたいなものや、行政の中の専門家の感性を市民にぶつけて、そのリアクションを受けながら専門家の価値も変わってきて、それが結果的にコラボレートになってきたという感じがする。それがいい結果を生んだということで、市民のこの活動をもっと活発化しましょうという感じで、市民活動をサポートするような活動がどんどん出てきた。それは一定程度進んだと思う。だから市民と行政のコラボレーションというのは当たり前の状況になっていて、それをあえて市民が上だとかと言ってすることもあまり重要ではなく、市民を上にも上げて何も新たな価値は生まないのではないか。次のあり方としては、大きな社会の構造とか、そういうものを踏まえながら価値をつくっていくというような、そこに市民も加わっていかねばだめみたいな、そういう話ではないかと思う。そこだけ預けても、市民が先の価値を提案してくれるわけでもない。
- 六川委員 地元と行政の信頼関係が生まれた。その信頼関係はすごく大事だと思う。だからその辺がうまく表現できるといいと思う。
- 西村部会長 だから感性に関しても、いろいろな人がいろいろなことを言えて、専門家だけではなく、ただ市民だけでもないと思う。
- 綱河書記 7ページの図はいろいろな意味を込めているが、どちらかというとはこれまではどんどん都市のインフラなどを充足させていくという、ものづくりが先にあるようなところに、都市デザインがかかわりを持っていくというような、空間づくりが先にあったケースも多かったらうということで、そういう表現をしている。実際、都市デザインは感性とか、そういうものを意識しないでやってきたことはないと思う。これからは、感性の側から、こんな活動、こんな暮らしがしたいねとか、そういうところからやっついていかないと、物づくりとか、それ自体も起こってこないものもあると。必ずしも完全に時代を読み切ったこうだというふうにできているものではないが、少なくともこういう感性からのアプローチというところが重要になってくるだろうということで載せたものである。
- もう一点。六川さんからの指摘であった、都市デザイン室としての役割について、都市デザインビジョン中で言っている都市デザインは、横浜市、市役所が行う都市デザインのことである。どちらかというとはアクションプランなどで、具体的な事業など、都市デザイン室が何を取り組んでいるかというところを書いていかないといけないと思っている。そこではどんな役回り、役所の中ではこんな役回り、市民との間ではこんな仕事をするというようなところが表現されてくるかと思っている。どうしても都市デザインイコール都市デザイン室という部分もあるが、必ずしも意識の中ではそうではない。例えば今、文化観光局で創造都市とかをやっているが、そういうところをやっていくのも含めて、ここでは都市デザイン行政が担っていく都市デザインの部分だと思っている。
- 国吉委員 都市としての自立みたいなものも踏まえた固有の活力とか魅力とかをつくっていくのだということについて、50年先もきちんと掲げて、それに対する短期的な対応や戦略、長期的なものをつくっていくことというのはきちんと言えると思う。郊外も含めて、トータルとしてそういうものをつくり上げていくのだということをもっと最初にしっかりと出していくことが大事かと思う。
- 小山書記 全体の構成がまだしっかりとしていないというところがいろいろと議論を呼んでいるところだと思う。西村先生が最初に言われたとおり、提言と都市デザインビジョンと

はどういう関係か、提言のコアのところについてどのように都市デザインビジョンに盛り込むかというのが大切かと思っている。その辺もご意見をいただきたい。

今、提案させていただいているところまでは、前回の提言の中からは、前段の部分をかみ砕いて書いている感じになっている。そうすると、提言でいただいたときの3つの視点と、今後の展開の中での8つの提案のところの表現はまだこの中に入っていない状態にある。その辺のところはアクションプランで提示しようと思っているが、そうだとすると提言いただいたコアの部分は何も入れないのもどうなのかなというところがある。その辺もご議論いただければと思う。

○佐々木委員 極端に言うと、私は全然対応していなくてもいいと思う。提言ではこういうことが大事だよとぼんと言われ、都市デザイン室としてこういうことを考えた。今度は提言を出した委員会に対して返すのではなくて、市民あるいは市全体に対してメッセージを公表するわけだから、これはここに、これはここにというのはもう要らない。多分これ1つで全部は無理だと思うので、都市「横浜」が目指していく都市デザインのビジョンはこうですと1つあればそれでいいのではないかと私は思う。「あ、このビジョンはいいよね」と思われるメッセージ性があるものをつくっていただけることを私は期待している。

○西村部会長 例えば風景例みたいな、そこのイメージに近いのではないか。

○佐々木委員 こういう形で横浜の都市デザインをこれからやっていきたいというメッセージとしてこの全体の文章や書類がまとまっていれば、それでいいのではないか。

○西村部会長 一方で国吉さんがおっしゃったように、50年たっても都市として目指さなければいけないところ、それは共有できなくはないような気がする。それは、ここにも書いてあるのが、固有性を生かすとか、横浜のインテグリティを保つみたいの意味でいうと、やらないといけないことはあるような気がする。こういうふうに1対1で対応する必要はないが。

○佐々木委員 それはある意味、当たり前としてどこかに書いておけばいい。

○国吉委員 多分みなとみらいのスカイラインにしても、赤レンガ倉庫の保存にしても、横浜はいいものがあるからいいねと言われるが、これを政策的にいろいろなところが協力してつくってきたことを、知らない人はたくさんいる。あえてそれを自慢する必要はないが、こうやって横浜はつくり上げてきたということの簡単な理解を示した上で、次の時代に向けてこういう横浜をつくるために新たな戦略を組み立てていくのだというようなことを市民に伝え、それはいいねと思われるようなメッセージを出していく。そして、いろいろなところが共同して、市民のアイデアも入れながら、いろいろなまちをつくってきたというのが出てくる。それを大事にしながら、これまでとは違ったまた新たな都市もつくっていかないとだめ。

○佐々木委員 このビジョンは、臨海部、都心部というところと、郊外部と、それから山と自然が残っているところが完全に相互補完関係にお互いのいいところを補い合って、全体の共同で横浜というものが持続していくというメッセージではないかという感じがする。どっちかという、関内とか、こちらのあたりのアーバンデザイン的なところが中心だったものを、そこがつくり上げてきた価値と、一方で市街化区域の線引きをきちんとやったがゆえに残されてきた、里山とか住宅地のめりはりとか、そこでの農とか里山を生かした市民活動などの完全な補完関係を束ねていろいろな活動をつくって行って、まちとしての自立、ある意味サステナビリティを保っていくというのがビジョンだということを明快に出してもいいのではないか。

○西村部会長 今まで都市デザインとしては臨海だったかもしれないけど、そこはそこで1つちゃんとした玉ができてきたので、もう少しほかの玉も補完的にやっていくという持続的な投資みたいなイメージ。

○佐々木委員 都市というイメージといったときに、都市と田園部、郊外部はワンセットで都市であり、いかに都市はこちに依存して生きているという補完関係がある。

○中津委員 それこそが新しい定義だと思う。

○西村部会長 郊外の空き家に住んでこちに通ったりする生活スタイルがあるのだということとはちょっと書いてある。

○**綱河書記** 最初の「はじめに」ところにそういうものをきちんと入れていったほうがいいというお話だったかと思うので、ここはその辺の話を盛り込む。絵も入れたらというのもあったが、それは適当なものが表現できるかどうかがあるので、そこは考えてみるが、言葉としての表現は補強していきたい。

○**佐々木委員** 頑張ってそういう絵図を描いたらいいと思う。大正の広重と言われている吉田初三郎という人の絵が最近すごくいろいろなところで注目されている。たしか神奈川県景観計画のリーフレットの表紙に吉田初三郎が神奈川をかいた絵が使われていると思う。あれをうまく横浜のこのビジョンを描く形にかいていって、かき込んでいるエレメントなんかを、生き生きとした人の活動が生まれるようなものにかき上げたら、それでオーケーではないかと思う。結構いろいろなところの景観計画をつくるときに絵図をつくる工夫をトライしたりしているが、非常に一目瞭然である。こういうふうはこの地域はこうつながっていて、ここにはこんな楽しさがある、ここにはこんな魅力がある、ここをこう行くとこんなふうにつながっていて、川も流れていてと、それらが1枚の絵に入っている表現力はすごいので、この断面図でちょっと試みているのをもう少し本格的にやったらと思う。富士山もかいてあったり、もっと遠くのほうの東京のこっちのほうにはスカイツリーが見えたり、当然そういうかき方はできる。ぜひ参考にさせていただきたい。

○**綱河書記** 今第2章のところに絵はあるが、これそのものはまだ下書きのような絵である。イラストそのもののクオリティーは最終的には上げるが、かき込みの密度とかをどんどん上げていくとかなり具体的な絵姿になっていくので、かき込んでいる要素は今下書きにあるもののプラスアルファぐらいかなと考えている。我々はそういうイメージでこの断面図のところは考えているが、「いやいや、もっとリアルにいろいろと見えるような絵にしていってほしい」とか、そういうご意見はあるか。

○**西村部会長** 確かに吉田初三郎的なものがかけるのであれば、それはイメージを喚起するのでいいと思うが、それはそれで吉田初三郎ぐらいの才能がないとなかなか感動させるものではないのではないか。

○**佐々木委員** 頑張れば、結構いけると思う。

○**中津委員** リアルというよりはイメージしやすいということ。それはリアルとはちょっと違うと思う。

○**西村部会長** 確かに市民向けということであれば、そこがメッセージとしてはすごく強くなるかもしれない。

○**六川委員** これは50年先というイメージが1つあるが、今までやってきた継続性みたいなことももうちょっと表現したらいいなと思う。例えば具体的に言うと、デザイン室は歴史的建造物を保存していこうということできずずっと活動しているが、これはこれからも続く。何となくそれはもう事業として終わってしまったような感じに受けとめられるが、そういうのがどんどん積み重なって行って、いいまちづくりになる。それは50年先の指針も見せる中でも同じことが言えるのではないか。

○**佐々木委員** 50年後といたら、今建った建物が50年後には歴史的になっている。今歴史的とみなされていないものも、ずっと50年ちゃんと使い続ければ歴史をつくることができる。

○**六川委員** 歴史的景観保存委員会というのは、デザイン室が所管しているのか。

○**綱河書記** はい。歴史の話も、今建てたというよりは、高度成長期とか、そういうところに建てたものがかなりの年数がたってきている。そういったストックをどううまく再編していくかというようなところもこれから大事な視点かと思う。

○**中津委員** 4ページの「2050年ごろを目標としています」と言ってそれで項目が終わってしまっていることが何かちょっと疑問である。6大事業が大きくて、それで50年かかってしまった、だから次の50年という発想はみんな知っているが、一般市民の人はそんなことはあまり思っていない。何で50年だろうというのがやっぱりある。もうちょっとかみ砕いて、ロングタームとショートタームがどういうふうにかかわっていくかみたいなものこそ何か絵が欲しいし、50年を考えるのであれば、そこからバックキャストしたときにどういうふ

うにショートタームを考えていくかなど。継続的なことというのを、注積みたいなのでもいいかもしれないが、もうちょっとここで入れておかないと。ここで「2050年ごろを目標としています。」で次の章になってしまうと、「あ、関係ないや」と思う人がいる可能性はある。この辺もうちょっと説明が欲しいし、ここそ何かダイアグラムのな、何が積み上がって50年になるかとか、50年先から振り返って今どうするべきかみたいなのが、何か絵になっていたほうがいい。

○佐々木委員 毎日ちゃんと朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて、寝てという、その毎日の生活をちゃんとやっていかないといけないみたいな意味で、ずっとやっていかなければいけない都市デザインの仕事というのと、何年後にはどんとこういうことをやっていこうというのと、両方が絶対必要。

○中津委員 日常の積み重ねでそれに行くわけだから、こっちとこっちが別のものというわけでは決してないと思う。

○国吉委員 参考にこの前、国土交通省で私がプレゼンテーションした図があるので、紹介する。都市デザインの機能に新たなものが入って行って、それが分派して、地域まちづくり課とか、創造都市の活動とか、景観法絡みで景観調整課とかがあり、全体としての都市デザインという枠と都市デザイン室があり、これらが微妙に関係しているような図で、今横浜はこういう状況ですと国土交通省で説明した。

○六川委員 話は変わるが、9ページにある、「有機」という2番目の言葉がわかりにくい。もうちょっとわかりやすい言葉はないか。

○西村部会長 この言葉は結構大事なメッセージになる。私も「有機」はちょっと違うのではないかと思った。「有機」というと自然発生的なという思いで、ここでは何かいろいろなネットワークが非常に複雑に絡み合って、単線的ではないというような意味だろう。

○綱河書記 従来だと関係性とか、そういう言葉で表現していた部分をもう少し、平面的よりはいろいろな意味合いで立体的に、今までなかったところともつながっていく、広がっていくようなイメージを何か言葉でつけれないかなということで、関係性というところをあえて今回「有機」と置きかえてみた。だが、別の意味に思えてしまったりという指摘もいただいている。

○佐々木委員 要するにツリー構造ではなくてセミラティスといったことを言いたいわけだろう。

○綱河書記 はい。

○国吉委員 田村さんがいたころは非定型流動とか、そういう言葉を使っていた。多軸、多視点で物の価値をつくるとか、そういうことを言っていた。

○中津委員 このページが実は一番チャレンジしているページである。ほかのページは何となく「ああ、そうだよね」だけど、ここが一番言葉の投げかけとしてはすごくチャレンジだから、ほかの言葉もあわせて、ここを本当は時間をかけて議論したほうがいいかなと思う。例えば私から見るとこの「再編」という字がすごく浮いていて、ここだけ妙に何かプラクティカル、技術的である。ほかのはすごくイメージを促すような、やわらかいほわっとした表現なのに、「再編」だけすごく具体的なイメージがあって、何か別の言葉はないかなと思う。

○西村部会長 多分議論した過程を知っているとそれなりに思うのだろうが、我々はぱっと見せられるわけだから、やっぱりちょっと変だなというところがあるかもしれない。

○六川委員 一般的な言葉でいいと思う。「有機」については、さっきの説明があればよくわかる。

○中津委員 「物語」とか「親近」とか「寛容」とかに比べると、「有機」と「再編」は何かちょっと違う引き出しに入っている。また、漢字でなくてもいいのではないかという気がする。漢字にこだわっているのか。

○綱河書記 端的にアピールするようなときに同じようなのが並んだほうがいいなというのはある。

○佐々木委員 「寛容」「親近」「物語」というのと「有機」「再編」はちょっと違う。寛容とか、親近感があるとか、物語性があるというのは、獲得目標としての価値と言えるのだけれ

ども、有機と再編というのは、それを実現するためにはこういう手法でやっていきたいと思います。寛容性に富んで、みんなにインテIMATEの近い感じが起きてきて、そこで物語ができるような町をつくりましょうということを経験にしましょう。それをやっていくためには、多様な関係性とか、今あるものの再コーディネートとか編集でやっていきたいと思いますというふうに、そういう2段に分けてしまっただけで説明すればちょっとわかりやすくなるような気もする。

○中津委員 順番を変えるだけで大分変わる可能性がある。前半は理念で、後半は手法みたいな。それとか漢字、漢字、漢字で、最後は平仮名とか。

○佐々木委員 当然目指すべきものの質によって選択される手法は違って来るわけだから、とにかく効率よく経済的にやろうと思えばツリー構造でやるというように、そうでないものを獲得しようと思えば、有機的な関係性とか再編という手法が必要ということで、ワンセットだと思うので、そういうふうに説明してしまえばいいのではないかな。これは最終的に直接市民が読んでわかるようなもので最初から書いていいのではないかな。

○綱河書記 今の9ページのところは、このビジョンの中でも全体を通して特に訴えたいところでもあるので、ここの表現、見せ方についてはさらに議論したいと思う。

○西村部会長 今の話だと「寛容」「親近」「物語」のあたりは皆さんかなりイメージがわくけど、「有機」と「再編」がびんとこない。

○中津委員 理念と手法である。

○西村部会長 手法だし、手法だとしても言葉がちよっと違うかなという感じというのは割と共通の印象のようである。

○中津委員 話が違うが、戦略的にはこれを市民の人たちによく理解してもらって、それで市民のムーブメントが起きたら、それを裏づけにまた役所の中にフィードバックされて、都市デザイン室が今後また8人以上に発展していくような、そういうようなことをちゃんとイメージしたほうがいいと思う。それと同時に都市デザインにかかわるいろいろなことを振り返ると、役所の中でこのドラフトの段階でどういうふうに他部署とのコラボレーションをするべきかというのをもうちょっと具体的にスタートしておいたほうがいいのではないかな。農政のことだったり、港湾のことだったり、「また都市デザイン室が勝手にやっている」というふうに言われてしまったらまた元の木阿弥で、これをつくることの意義は半減してしまう気がする。本当はこういうものが私たちのテーブルの上に出てくる前に、オフィシャルでないかもしれないが、少なくともちゃんと情報を横に流して意見を聞くようなことが重要。

○西村部会長 でも常識的に考えると、自分のところの課から見ると全部消されていってしまっただけで、都市デザイン室のところだけしか書けなくなってしまうかもしれない。

○中津委員 でも少なくともこういうものをつくっていることをドラフトの段階で何か情報が入ってくるのと、これが全部冊子になって、「市民がこんなものを持っているけど、港湾どう。」と急に港湾の人が「何これ」となるのは全然違う。

○綱河書記 そういうわけにはいかない。

○西村部会長 今まで農政は都市デザインとは言わなかったかもしれないけど、線引きを頑張ってきたということは、大きな意味でいえば都市デザインを頑張っているのだという話で、頭の中でうまく位置づけてもらえるようなことをしていただけるとありがたいと思う。

もう一つ、これは非常に長期だから、いわゆる長期計画よりもはるかに長期なので、どういうふうに市の中で位置づけるかというのがある。多分法定計画のほうにもこういうものがリファアされていったりすることによって、これがあまり棚に置かれられないようなものにするというような工夫も必要な気がする。

○国吉委員 オーソライズすればそれがまた進むかということ、必ずしもそうでない。昔の手法だと、こういうのをもとにアクションプランみたいなものを幾つか仕込むわけだが、その中で1つか2つ各局の協力を得て実現したものができてくると、これはいけるねという評価も出てきて、本体が生きてくる。みんな認識しろと言ってやればそれで進むかということ、必ずしもそうでなくて、実践を経ながら理解を深めるという感じだったのではないかなと思う。

○中津委員 それは今までやってきたやり方である。

	<p>○佐々木委員 それでいけなくなりつつある。</p> <p>○中津委員 ここ（横浜市都市美対策審議会）に出てくる案件はみんなそうではないか。</p> <p>○国吉委員 今ある動きの中で新たな実践をどうするかというところが説得力になるのではないかと私は思う。もちろん会議はやるのだけど、会議をやってもそれだけでは物は動かない。</p> <p>○六川委員 今のポイントはすごく大事だと思う。特に先を見据えたという形になると、市民から見てわかりやすい都市デザイン行政でないといけない。さっきの繰り返しになるが、例えば都市デザイン室が少し今機能分担しているデメリット、メリットとはちょっとあると思う。</p> <p>○綱河書記 我々のところは人数的にはずっとこんな程度のところだが、例えば歴史の関係でいけば横浜ヘリテイジみたいなどころのように市の外側にも一緒に取り組んで政策を実現していけるところも出てきている。そういうものが今後どんどんふえてくる、そういうところも含めて都市デザインを進めていくというような体制については、4章のところでも触れていきたい。</p> <p>○綱河書記 いろいろと意見をいただいているが、そのいただいた意見をもとにもう一度修正をかけて、またご審議いただくという形になる。</p> <p>（2）その他</p> <p>○綱河書記 本日の議事録は、横浜市の保有する情報の公開に関する条例に基づいて、議事録は公開することになっている。部会長の確認を経て、閲覧に供させていただく。</p> <p>閉 会</p>
資料	<p>資料1：(仮称) 横浜都市デザインビジョンについて</p> <p>資料2：第8回横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録</p>
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の議事録については、部会長が確認する。 ・次回の開催は10月30日とする。